

前 東 代 遺 跡

一 播但有料自動車道建設にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅲ) 一

1985.3

兵庫県教育委員会

前東代遺跡

—— 播但有料自動車道建設にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅲ） ——

正誤表

頁	行	誤	正
3		昭和58和度	昭和58年度
3		副課長 道畑 實	削除
18	7	扁平は体部	扁平な体部
20	5	欠部を	削除
20	6	縁側部	側縁部

前 東 代 遺 跡

— 播但有料自動車道建設にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅲ) —



木簡 3



木簡 2・1

例 言

1. 本書は、兵庫県道路公社の委託を受け、兵庫県教育委員会が昭和58年6月11日～9月13日に発掘調査を実施した兵庫県姫路市御国野町深志野に所在する前東代遺跡の調査報告書である。あわせて確認調査を実施した大村地区、佐土地区も収録した。
2. 本書で示す標高値は、公社の設定した工事用B.Mからの値である。方位は座標北を示す。
3. 調査にあたって、姫路市教育委員会山本博利・秋枝芳両氏に多大の協力を得た。また高橋学氏には現地で適切な地理的助言を得た。
4. 本書に使用した遺構の実測は、西口和彦・水口富夫・清水洋子・小谷義男・池田早恵・石本淳子・各務由志子・中村幸恵・小川真理子が分担し、トレースは、清水洋子・和田早芳子が行った。
5. 遺物の実測・トレースは、和田早芳子が主として行い、石器の実測・トレースは、中川貴が行った。
6. 木簡の解読は、奈良国立文化財研究所 鬼頭清明氏にお願いした。
7. 本書の編集は、西口和彦・水口富夫があたり、和田早芳子の協力を得た。本文の執筆者は文末に氏名を記したとおりである。

目 次

例 言

I はじめに	1
II 前東代遺跡	5
III 大村地区	25
IV 佐土地区	35

I はじめに

1 調査に至る経過

播但連絡有料自動車道（以下、播但道）は、播磨と但馬を南北に結ぶ自動車専用道路である。昭和48年、姫路市砥堀・福崎町間が開通後、現在、姫路～市川インターチェンジ間が供用開始されている。また福崎インターチェンジに於て、中国縦貫自動車道と接続し、今後、兵庫県西部地方の最重要な南北道となる道路である。しかし、現在のところ、南端にあたる姫路中インターチェンジの位置は、国道2号線や同姫路バイパスから北に離れ、有効な南北接続道としての役を果たさず、交通関連各社から早急な処置が望まれていた。よって今回、姫路中インターチェンジから南下し、姫路バイパス接続地までの建設が開始されることになった。

昭和57年、県教育委員会は建設事業者である県道路公社の依頼により、予定路線内の埋蔵文化財分布調査を実施した。分布調査は、県道路公社姫路工事々務所と、姫路市教育委員会の協力を得て、2回にわたり実施した。

予定路線の周辺は、壇場山古墳や播磨国分寺、御着城などの遺跡が多く、古代から中世における播磨の中心地である。分布調査前は、多くの埋蔵文化財が発見されると予想されたが、現地踏査の結果は、「深志野地区」以外、明確な遺跡は認められなかった。しかし、上記の歴史的環境を踏まえ、工事中に新たに発見された遺跡については、その都度各関係者間で協議し、保護策を講じることになった。

前東代遺跡

⁽¹⁾「深志野地区」は、史跡「御着城跡」の北約500mに位置している。分布調査では、土器片等の遺物は採集されなかったが、北西から南東にかけ分約200m間にカギ状に曲る凹地が認められ、あたかも御着城外濠かの様であったので発掘調査により遺跡の確認を行うことになった。

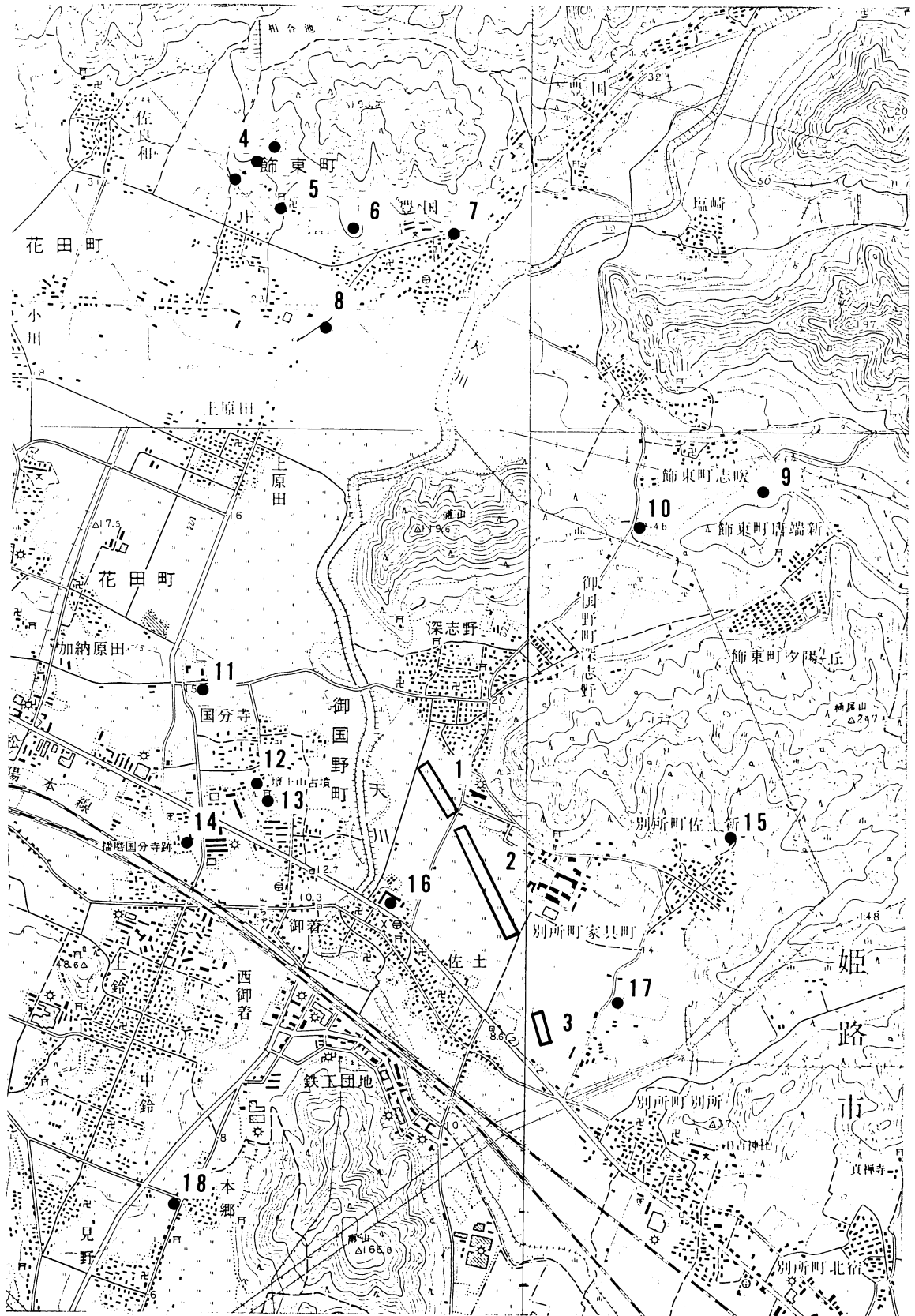
(1) 深志野地区は、当初「御着城外濠跡」と呼称したが、調査の結果、奈良・平安時代の遺跡となったので「前東代遺跡」に名称を変更した。

大村地区・佐土地区

両地区は、深志野地区の調査期間中に協議・調査を実施した地区である。

「大村地区」では、道路建設工事に伴う仮用水路の掘削中に、中世陶磁器片が採集された。また同時に、姫路市教育委員会においても、伝承「大村千軒」の調査・研究が進められていた。遺物採集地点が、推定遺跡範囲の一部に当たるとの考えにより、協議の結果、遺跡確認調査を実施した。

姫路市東部を南北に縦走することになる播但道は、東西に走ると推定される古代山陽道



第1図 調査地点位置図 (1 : 25,000 「姫路北部」「姫路南部」「笠原」「加古川」)

- | | | |
|-----------|----------|------------|
| 1 前東代遺跡 | 7 豊国廃寺 | 13 壇場山古墳 |
| 2 大村地区 | 8 上原田遺跡 | 14 国分寺 |
| 3 佐土地区 | 9 志吹池古窯跡 | 15 佐土新宮脇古墳 |
| 4 トノク谷古墳群 | 10 小丸山古墳 | 16 御着城跡 |
| 5 宝塚古墳 | 11 国分尼寺 | 17 佐土新村前古墳 |
| 6 トオトツカ古墳 | 12 山の越古墳 | 18 本郷廃寺 |

を何処かの地点で横断することとなる。播磨国分寺・同国分尼寺や推定佐突駅家などの位置関係を考慮し、また最近の歴史地理学の研究成果を踏え、推定「古代山陽道」とされる範囲に試掘溝を設定し、確認調査を実施した。(西口 和彦)

2 調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

昭和58年度発掘調査の体制

調査事務 社会教育・文化財課

課長 西 沢 良 之

文化財担当参事 大 西 章 夫

副課長 森 崎 理 一

副課長 道 畑 實

課長補佐 池 田 義 雄

埋蔵文化財調査係長 櫃 本 誠 一

技術職員 大 平 茂

課長補佐兼管理係長 福 永 慶 造

主任 八 家 均

事務職員 杉 本 恵 子

調査担当 社会教育・文化財課

主任 西 口 和 彦

技術職員 水 口 富 夫

調査補助員 小 谷 五 郎 広 畑 晴 生

小 谷 義 男 清 水 洋 子

青 木 祐 美 藤 原 裕 子

平 野 理 香 池 田 早 恵

井 上 喜 美 代 石 本 淳 子

各 務 由 志 子 神 吉 由 香

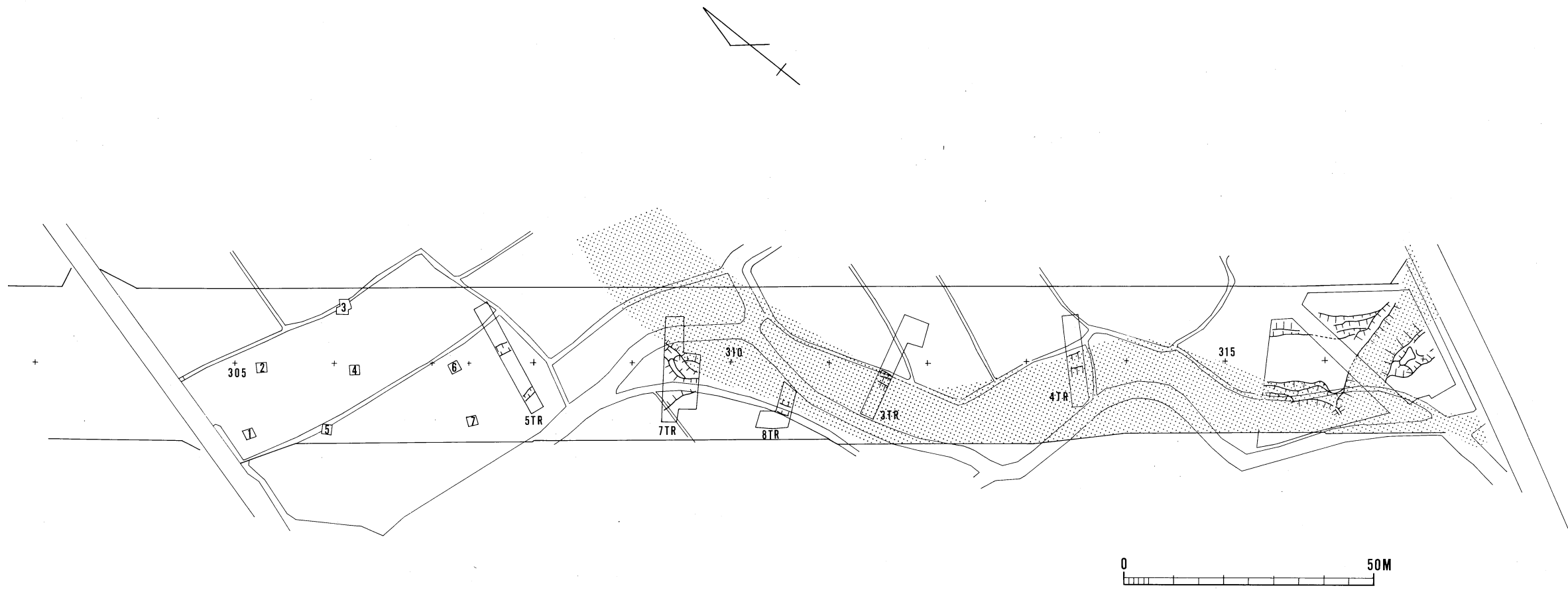
中 村 幸 恵 小 川 真 理 子

尾 西 行 雄 清 水 昇 司

梅 沢 真 実

昭和59年度整理調査の体制

社会教育・文化財課	課長	西沢良之	
	文化財担当参事	大西章夫	
	副課長	森崎理一	
	課長補佐	和田富男	
	埋蔵文化財調査係長	櫃本誠一	
	技術職員	大平茂	森内秀造
	管理係長	小西清	
	主査	坂本豊明	
	事務職員	杉本恵子	
調査員	主任	西口和彦	
	技術職員	水口富夫	
整理参加者		和田早芳子	



第 2 図 前東代遺跡調査地点位置図

II 前東代遺跡

遺 構

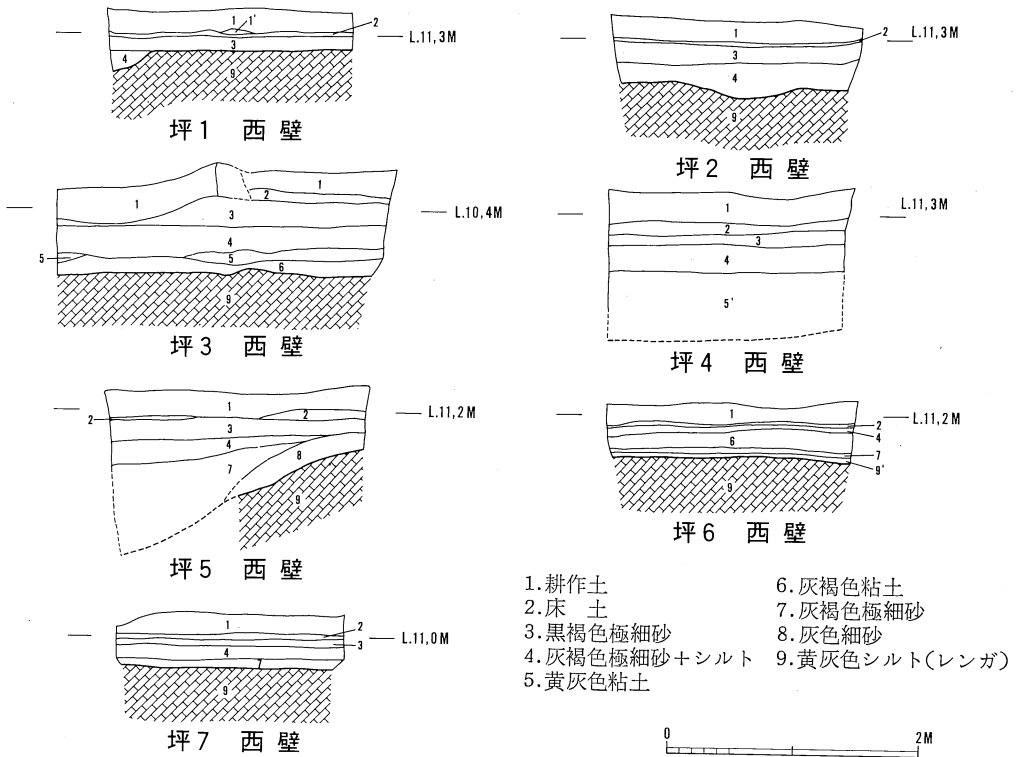
この地区は、当初御着城推定外濠跡として発掘調査を開始した所である。

昭和52年度から54年度にかけ、姫路市教育委員会により、御着城発掘調査が実施され、多くの資料が報告されている。その報告の中で、『御着城地宝暦絵図』を基に、本丸・二ノ丸・濠跡等の位置復元が試みられているが、外濠については推定の域を出るものではなかった。

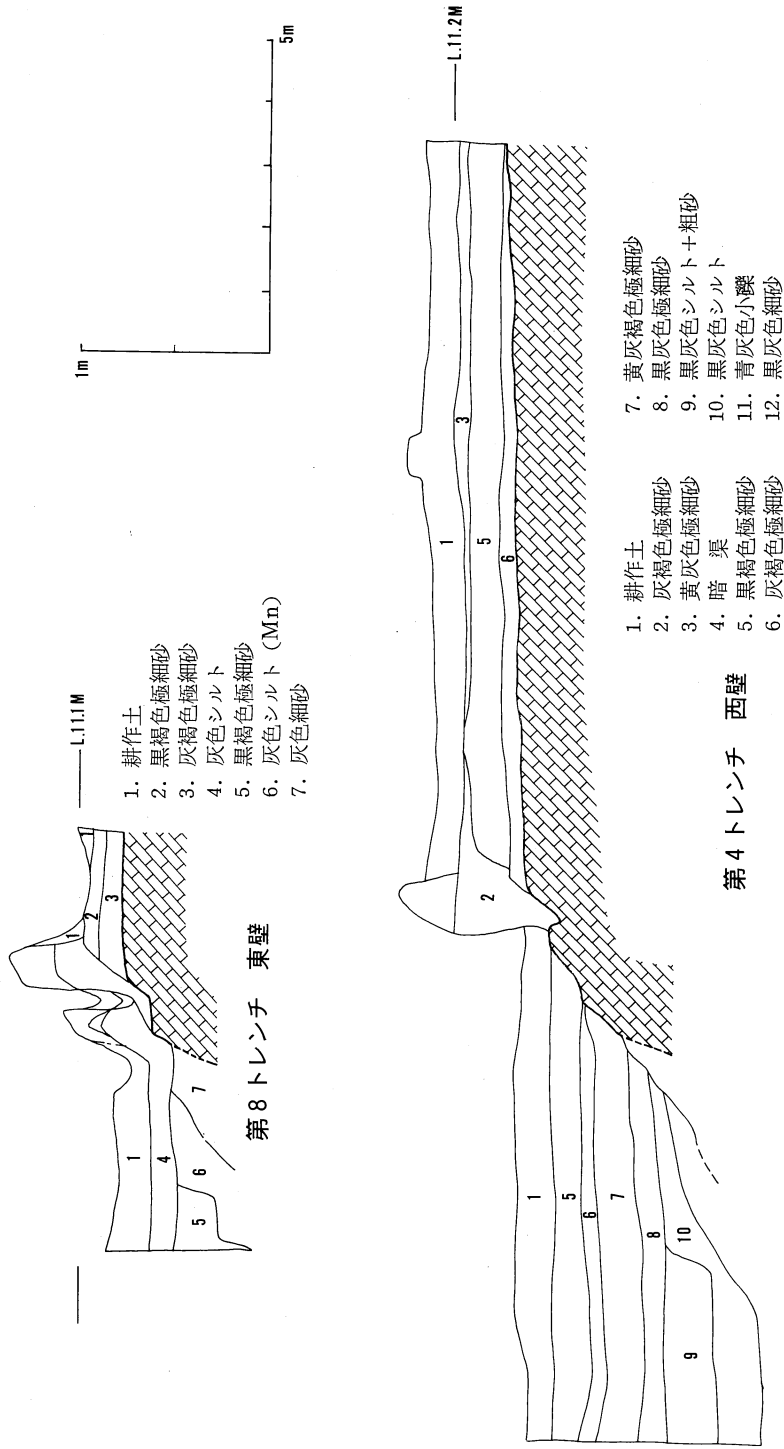
分布調査における現地観察で、北西から南東にかけ約200m間に、幅約10~15mで周囲水田面より約40~50cm程低い水田がカギ状に連なっているのが認められた。またその凹地の中を農業用水が流れている。まさに、それは『宝暦絵図』の外濠かの様相を呈していた。よって、発掘調査は凹地内を流れる用水路の流路変更後、濠岸を確認する目的でトレンチ調査から開始した。

県道御国野御着線よりを第1トレンチとし、順次西方へ6本のトレンチを設定した。

各トレンチ内における土層の堆積は、ほぼ同様なもので、東から西に緩やかに下がる黄



第3図 前東代遺跡確認調査土層図



第4図 前東代遺跡トレンチ土層図

灰色シルト層を基盤面とし、その上に黒灰色細砂や黄灰褐色細砂が堆積していた。

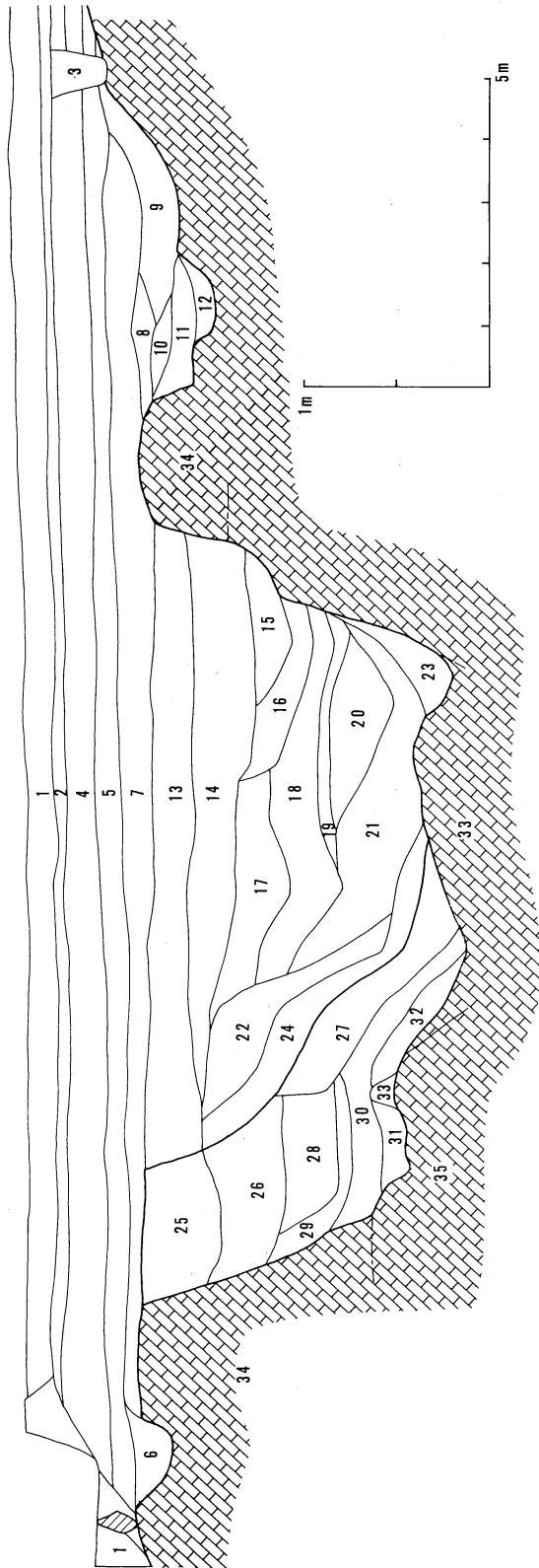
その結果、濠として有効な構造、例えば濠岸における急激な落ち込み、また堆積土層中からの戦国時代末期（15～16世紀）に相当する遺物の出土等が認められないので、御着城外濠では無いと判断し、凹地内の土層堆積状況から、当地形は旧河道痕跡と考えた。以上のことより、調査目的の外濠確認調査は終了したが、二、三のトレンチ内より、遺物を検出したので、あらためて、調査範囲を拡張し、旧河道の調査を実施した。

旧河道は、北西から南東に流れ、幅約20mと考えられる。土層堆積状況は前記のとおりである。さらに第1トレンチにおいて、北東からこの旧河道に流入する大溝を検出した。合流点は、第2トレンチ付近で、須恵器・木簡を検出したので、トレンチ調査から全面調査に変更した。

大溝は幅約10m、深さ約1.5mを測る。溝の埋土には、青灰色細砂や黒灰色砂が幾層にも堆積し、それらに包含される遺物から、大溝は奈良時代末から平安時代前期にかけて存在したものと考えられる。またこの大溝が旧河道に合流していることから、旧河道も平安時代前期頃までは河道として存在したものと考えられる。ただし、これら旧河道や大溝を使用した人々の集落遺跡は調査範囲内では認められず、しいて遺跡の所在地を推定するならば、大溝の上流域、深志野集落近辺が妥当なものと考えられる。

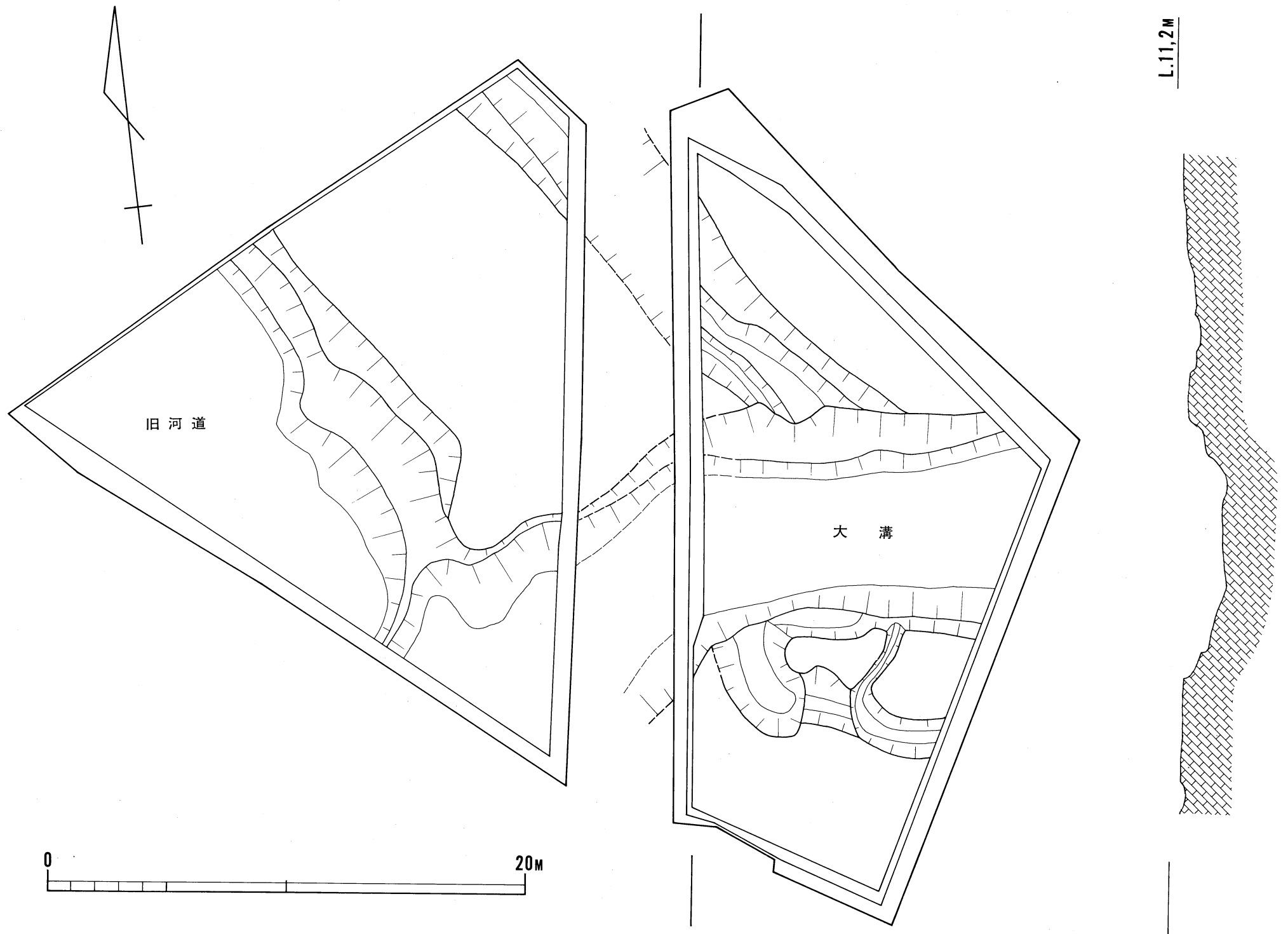
第7トレンチでは、旧河道より約2m西に弥生時代中期の土器を包含する溝を検出した。溝はトレンチ内で、西方から東方に狭くなる。よって、第8トレンチを東約15mの位置に設定し、弥生時代の溝の検出に努めた。しかし同トレンチでは検出できなかった。なお、第7トレンチでは、溝西岸で完形の弥生時代中期の壺を検出している。また、第5トレンチの北西においては、2×2mの坪掘り調査で遺構の確認を行なったが、坪番号4番で若干の土器片を採集したのみで、遺構は認められなかった。 (西口 和彦)

- (1) 姫路市教育委員会『御着城跡発掘調査概報』 昭和56年3月31日
- (2) 注1の報告書による使用法に準じた。

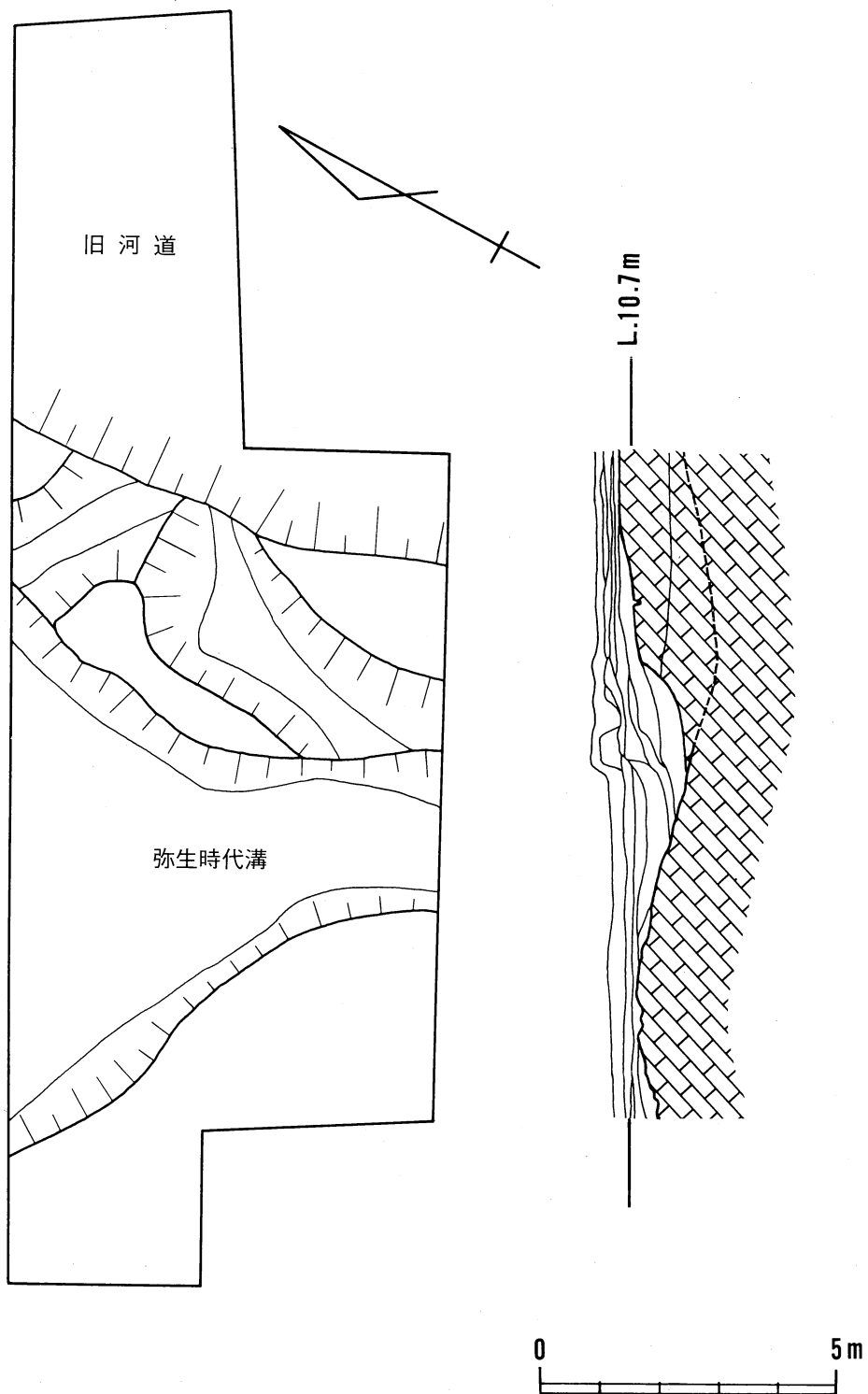


- | | | | |
|------------|------------------|------------------|-----------------|
| 1. 耕作土 | 10. 灰色極細砂 | 19. 黒灰色シルト | 28. 青灰色シルト |
| 2. 黄灰色極細砂 | 11. 黒灰色シルト質極細砂 | 20. 青灰色粗砂+黒灰色シルト | 29. 灰色極細砂 |
| 3. 暗渠 | 12. 黒灰色シルト | 21. 黒灰色シルト+細砂 | 30. 流木堆積層 |
| 4. 茶褐色極細砂 | 13. 黒褐色極細砂 (Mn) | 22. 黒灰色シルト+細砂 | 31. 青灰色砂 |
| 5. 黒褐色極細砂 | 14. 青灰色極細砂 | 23. 灰色シルト | 32. 青灰色粗砂 (流木含) |
| 6. 灰色極細砂 | 15. 黒灰色シルト (粗砂混) | 24. 黒灰色シルト | 33. 黄色礫 |
| 7. 青灰色極細砂 | 16. 黒灰色シルト (小礫混) | 25. 黄灰色極細砂 | 34. 黄灰色シルト |
| 8. 黒灰色極細砂 | 17. 黒灰色シルト+細砂 | 26. 黄灰色シルト質極細砂 | 35. 青灰色粗砂 |
| 9. 淡黒灰色極細砂 | 18. 黒灰色シルト+細砂 | 27. 黒灰色シルト (流木含) | |

第 5 図 前東代遺跡東区大溝土層図



第 6 图 前東代遺跡旧河道大溝平面图



第7図 前東代遺跡第7トレンチ

遺物

前東代遺跡の遺物は、出土位置を大きく分類すると、西方の坪掘り調査（7穴）によって出土したもの、トレンチ調査（5本）によって出土したもの、東端の全面調査域から出土したものに分かれる。なお、東端の全面調査域は、南北方向の用水路を境に西区と東区に分けた。それぞれの遺物番号の後に、出土場所・層位を記してある。

（1）西区 第5層

土師器の土埴で、口径26.6cm。淡赤灰色。

（2）坪No.4 第5層

弥生土器の甕で、口径32.0cm。口縁部が「く」の字形に外反し、端部下端は若干下方へ張り出す。

（3）第7トレンチ 黒色シルト

弥生土器の壺底部で、胴部下半を残す。外面に縦方向のヘラ磨きを施す。内面にハケ目痕が残る。底部は、わずかに凹み、中心部をナデている。暗灰色。

（4）第7トレンチ 黒色シルト

弥生土器の壺で、口径16.0cm、器高47.3cm。頸部に櫛描直線文を7帯施し、下の4帯の間に波状文がある。胴部外面下半は縦位のヘラ磨きが残る。黄灰色。

（5）第3トレンチ 第3層

須恵器の小皿で、口径7.7cm、器高1.5cm。底部に糸切り痕を残す。暗青灰色。

（6）第4トレンチ 第3層

土師器の小皿で、口径9.0cm、器高2.0cm。橙灰色

（7）第5トレンチ 第3層

土師器の坏で、口径12.3cm、器高2.6cm。内面と外面上半をていねいなロクロナデによって仕上げる。淡黄灰色。

（8）第5トレンチ 北溝

須恵器の碗で、口径14.4cm。内外ともロクロナデ。口縁部に黒色の自然釉がかかる。青灰色。

（9）第5トレンチ 第3層

白磁の碗で、口径13.4cm。全面に釉がかかっている。灰白色。

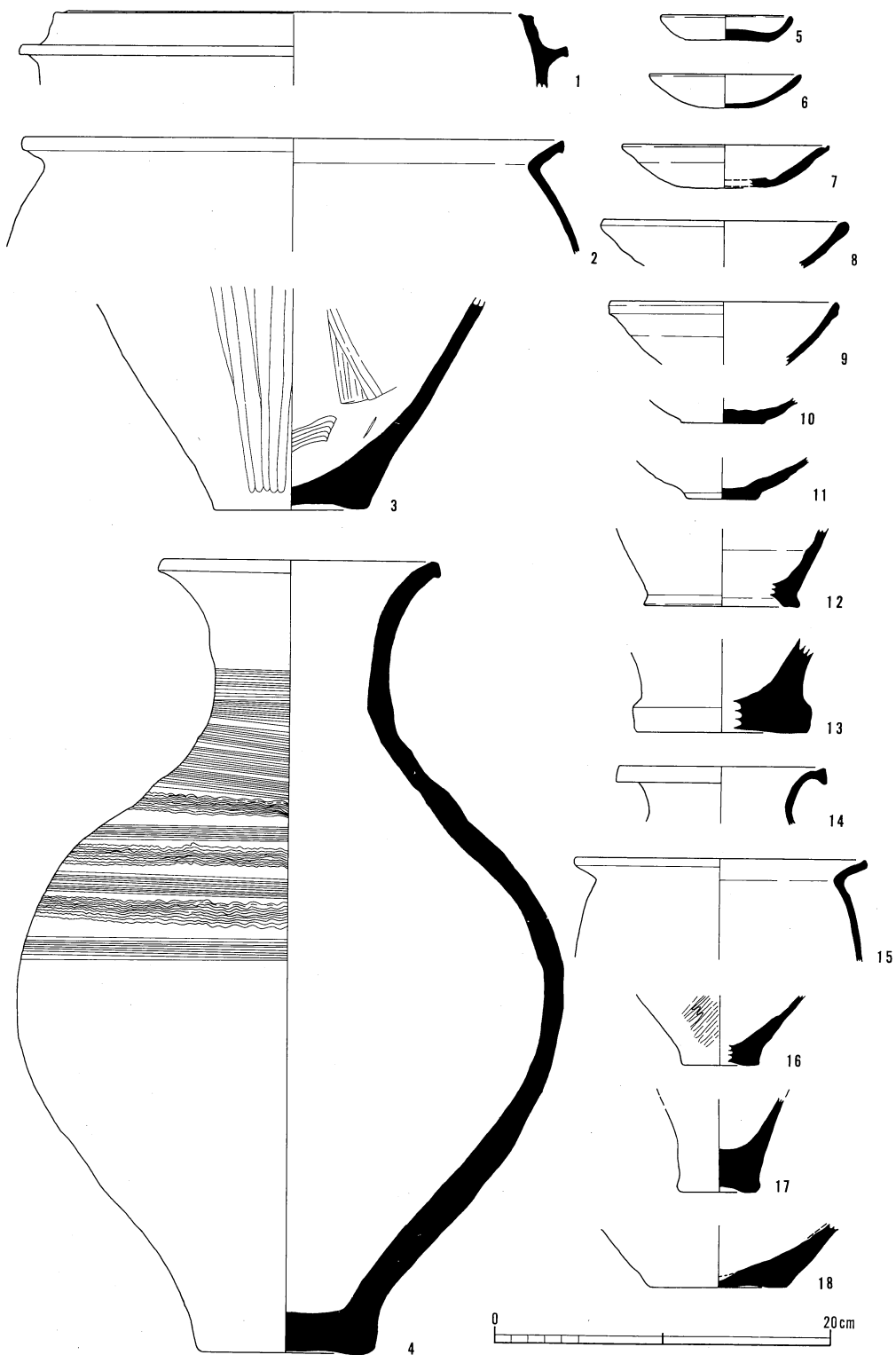
（10）第3トレンチ 旧河道黒灰色極細砂

須恵器の碗で、底径5.0cm。内外ともロクロナデ。底部は糸切り痕が残る。旧河道内堆積の最上層で出土した。灰色。

（11）第5トレンチ 第3層

須恵器の碗で、高台が円盤状に明瞭に突起する。灰色。

（12）第3トレンチ 旧河道黒灰色極細砂



第 8 图 前東代遺跡出土遺物 (1)

須恵器の壺底部で、張りだした高台が残る。内外ともロクロナデ。(10)と同層から出土した。青灰色

(13) 第7トレンチ 溝内

須恵器のすり鉢の底部で、底径10.0cm。精良な胎土を用いている。旧河道埋没時に、ほぼ旧河道と平行して南北に流れていた溝内から出土した。暗青灰色。

(14) 第7トレンチ 旧河道灰色極細砂

弥生土器の壺で、口径12.1cm。口縁端部はヨコナデによって整形し、端部は垂下する。黄褐色。

(15) 坪No.4 第4層

弥生土器の甕で、口径17.1cm。端部は丸くおさめる。暗黄白色。

(16) 坪No.7 第4層

弥生土器の甕底部で、体部外面に粗いタタキ目が残る。

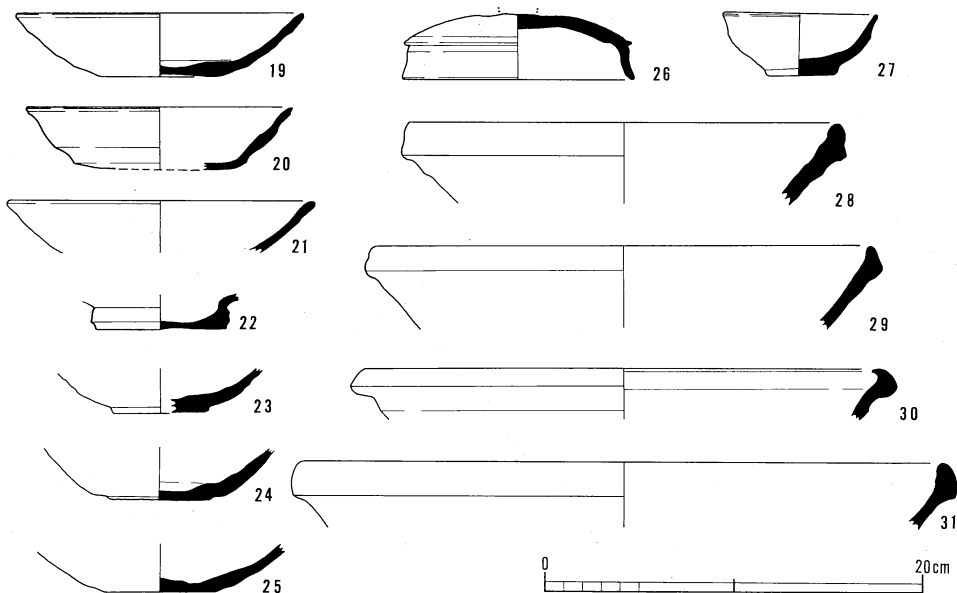
(17) 第7トレンチ 黑色シルト

弥生土器の甕底部で底部外面を指押えによって整形している。底部は中心部を指押えによって凹ませている。暗黄灰色。(3)とは同層から出土

(18) 坪No.4 第4層

弥生土器の壺底部で底径8.0cm。黄灰色。(2)、(15)とは同層から出土。

(19) 西区大溝 上層



第9図 前東代遺跡出土遺物(2)

土師器の埴で、口径15.0cm、器高3.4cm。底部に糸切り痕が残り、黄灰色。内外ともロクロナデ。

(20) 西区大溝 上層

土師器の埴で、口径14.0cm、器高3.4cm。底部の調整は不明。暗灰色。底部以外はロクロナデ。

(21) 西区大溝 中層

須恵器の埴で、口径16.1cm。内外ともロクロナデ。胎土精良。灰色。

(22) 東区 旧河青灰色極細砂

須恵器の埴で、円盤状高台が大きく突出する。糸切り痕を残す。青灰色。

(23) 西区大溝 第5層

(24) 西区大溝 第5層

(25) 西区大溝 第5層

(23)～(24)は、いずれも須恵器の埴で、内外ともロクロナデ調整を行っている。(25)のみ平底であるが、(23)、(24)は、円盤状の高台をもつ。底部はいずれも糸切り痕を残す。色調は、(24)のみ灰白色。(23)、(25)は灰色。

(26) 東区 第4層

須恵器の蓋で、口径12.1cm。内外ともロクロナデ。つまみの付くタイプであろうが、欠損している。外面に自然釉がかかる。灰色。

(27) 西区 第4層

須恵器の小埴で、口径7.9cm、器高3.3cm。底部は円盤状に突出し、糸切り痕が残る。体部外面には自然釉が付着する。灰色。

(28) 東区 第4層

(29) 東区 第5層

(30) 西区 大溝上層

(31) 西区 第5層

(28)～(31)は、東播磨系のこね鉢の破片である。(29)を除いて、いずれも口縁端部を肥厚させるタイプである。口径は、(28)22.5cm、(29)26.1cm、(30)26.6cm、(31)33.6cmである。

(32) 西区 旧河道黒灰色砂層

(33) 西区 旧河道黒灰色砂層

(34) 西区 旧河道黒灰色砂層

(32)～(34)は、いずれも須恵器の蓋で、(32)は口径13.4cm、器高3.9cm、(33)は口径13.9cm、器高3.3cm、(34)は口径13.6cm、器高4.1cm。(32)は天井部の一部にヘラ削りを残すが、他はロクロナデと天井部未調整で仕上げている。

(35) 西区 旧河道黒灰色砂

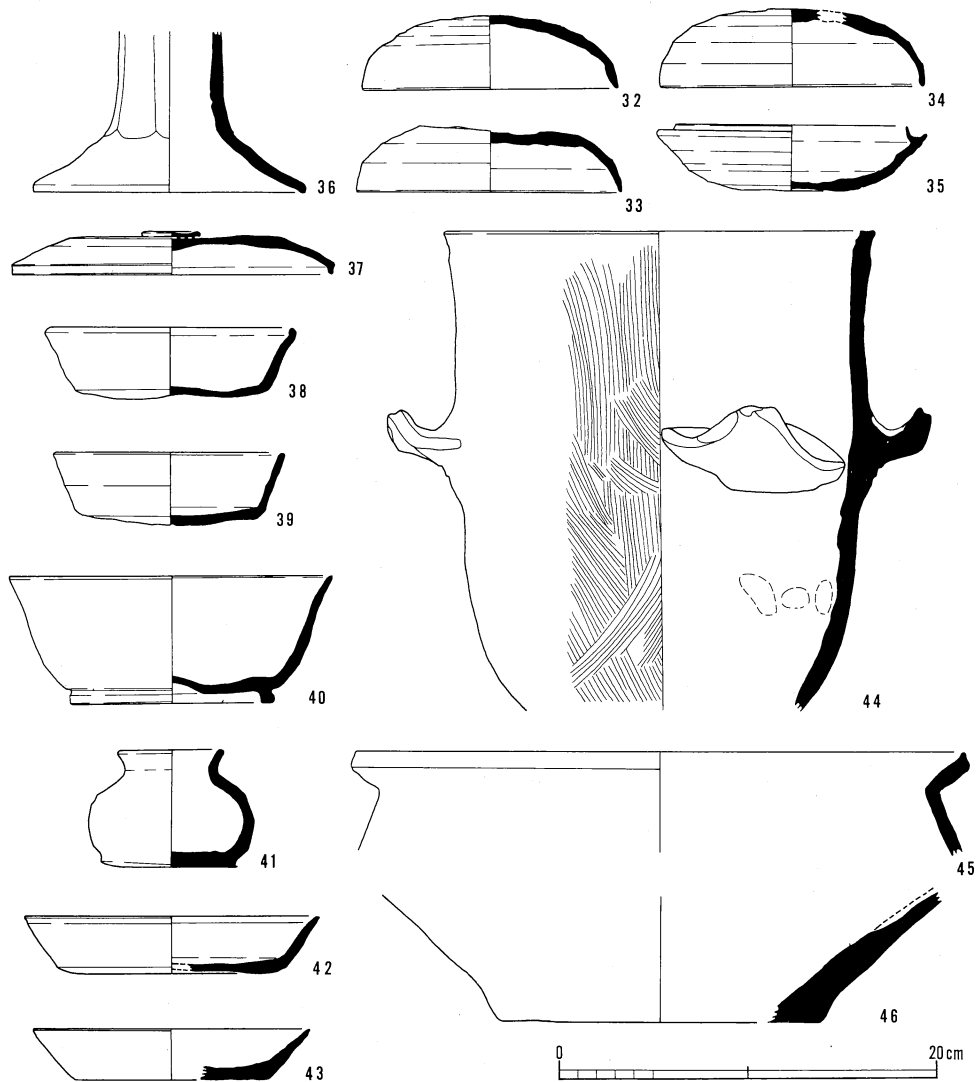
須恵器の坏で、口径 12.2cm、器高 3.5cm。底部外面のみ未調整であるが、他はロクロナデによって仕上げている。青灰色。

(36) 西区 旧河道黒灰色砂

土師器高坏の脚で、脚部のヘラ削りは、裾部から上部方向へ行ない、断面八角形を呈すが正八角形ではない。裾部外面はともにロクロナデによって調整されている。暗黄灰色。

(37) 東区 大溝中層

須恵器の蓋で、口径 16.8cm、器高 2.3cm。扁平は体部で、宝珠状のつまみも平たくなっている。頂部にはヘラ削りが認められる。縁部と内面はロクロナデ調整で、内面にはその



第10図 前東代遺跡出土遺物(3)

後不定方向のナデが施されている。灰色。

(38) 東区 大溝中層

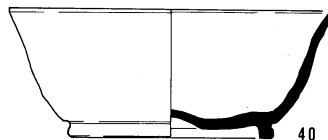
須恵器の坏で、口径12.7cm、器高3.8cm。軟質の焼きで、平らな底部に開き気味の口縁部がたちあがる。内面と体部外側はロクロナデで、底部外面は未調整である。暗黄白色。

(39) 東区 大溝中層 黒灰色シルト

須恵器の坏で、口径12.0cm、器高3.9cm。底部はヘラ割り。体部外面と内面はヨコナデ。(38)と同タイプと思われるが底部の調整と(38)が口縁部を内側に丸めているのに対して(39)は体部から直線的に口縁端部へとつながる点が異っている。焼きはやや甘く灰色を呈す。

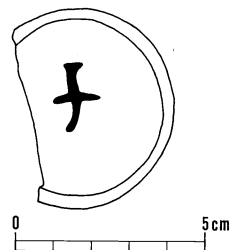
(40) 西区 旧河道青灰色礫層

須恵器の坏で、口径17.0cm、器高6.9cm。底部に焼けひずみの痕があるが、平たい底部に深く外側に広く口縁部からなり、口縁端部は丸く終わる。高台は、やや外側にひらき気味である。底部外面に「+」の墨書がある。青灰色。



(41) 西区 大溝中層 黒灰色シルト (小礫層)

須恵器の小壺で、口径5.2cm、器高6.3cm。完形品で、口縁部外開き気味にたちあがり、端部は丸くおさめる。口縁部及び体部内外面は、ヨコナデ。底部外面に糸切り痕をとどめる。青灰色。肩部の一部から底部にかけて、外面に灰かぶりのため緑色の釉が厚くかかる。「大日真□」の木筒のごく近くから出土したものである。



第11図 墨書土器

須恵器の小壺で、口径5.2cm、器高6.3cm。完形品で、口縁部外開き気味にたちあがり、端部は丸くおさめる。口縁部及び体部内外面は、ヨコナデ。底部外面に糸切り痕をとどめる。青灰色。肩部の一部から底部にかけて、外面に灰かぶりのため緑色の釉が厚くかかる。「大日真□」の木筒のごく近くから出土したものである。

(42) 東区 大溝中層 黒灰色シルト

(43) 東区 大溝中層 黒灰色シルト

土師器の皿で、(42)は口径15.4cm、器高3.0cm。(43)は、口径14.4cm、器高2.7cm。(42)は底部内面、体部内外面をロクロナデ。底部外面縁辺は、ヘラ割りで、中心部は一定方向のナデによって仕上げている。口縁端部内外に一条の沈線。淡黄灰色。(43)は、底部内面、体部内外面をロクロナデ。底部外面を乱ナデによって仕上げている。淡黄灰色。

(44) 東区 大溝中層 黒灰色シルト

土師器の把手付甕で、口径23.0cm。わずかに上方に開く筒状の器体である。口縁部内外をヨコナデしており、体部外面には粗いハケ目を付けている。内面の調整は不十分である。把手は胴部のほぼ中央に上巻き舌状に付く。底部が欠損しているためいちおう甕としておく。

(45) 東区 大溝下層

弥生土器の甕で、口径32.0cm。胎土が粗く器表の残りはよくない。黄灰色。

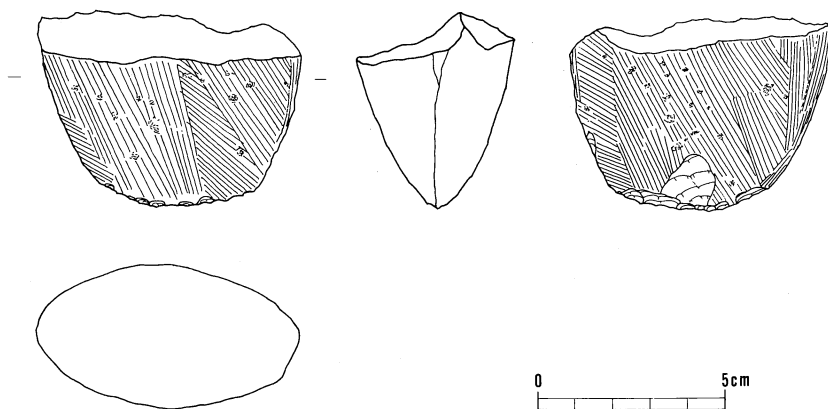
(46) 東区 大溝下層

弥生土器の壺底部である。底径16.7cm。器表の調整は剝落のため不明である。

(47) 東区 大溝第33層直上

太形蛤刃石斧の刃部で、身部を欠部を欠損している。刃部には、敲打状のつぶれを伴う剝離よりなる使用痕が残る。器表はていねいに研磨されている。縁側部には製作時と考えられる敲打痕がわずかに残る。残存長5.3cm、最大厚4.25cm。石材は閃緑岩か。

(水口 富夫)



第12図 前東代遺跡出土遺物(4)

木簡1 (第13図1)

残存長97mm、幅17mm、厚さ4mmを測る。木簡2と同一形態をする。赤外線テレビ撮影で墨書痕跡を認めるが判読不可能である。

(97) × 17 × 4 杉 柎目材

木簡2 (第13図2)

残存長116mm、幅20mm、厚さ5mmを測る。頭部は圭頭となり、上部両辺に切り込みを入れる。

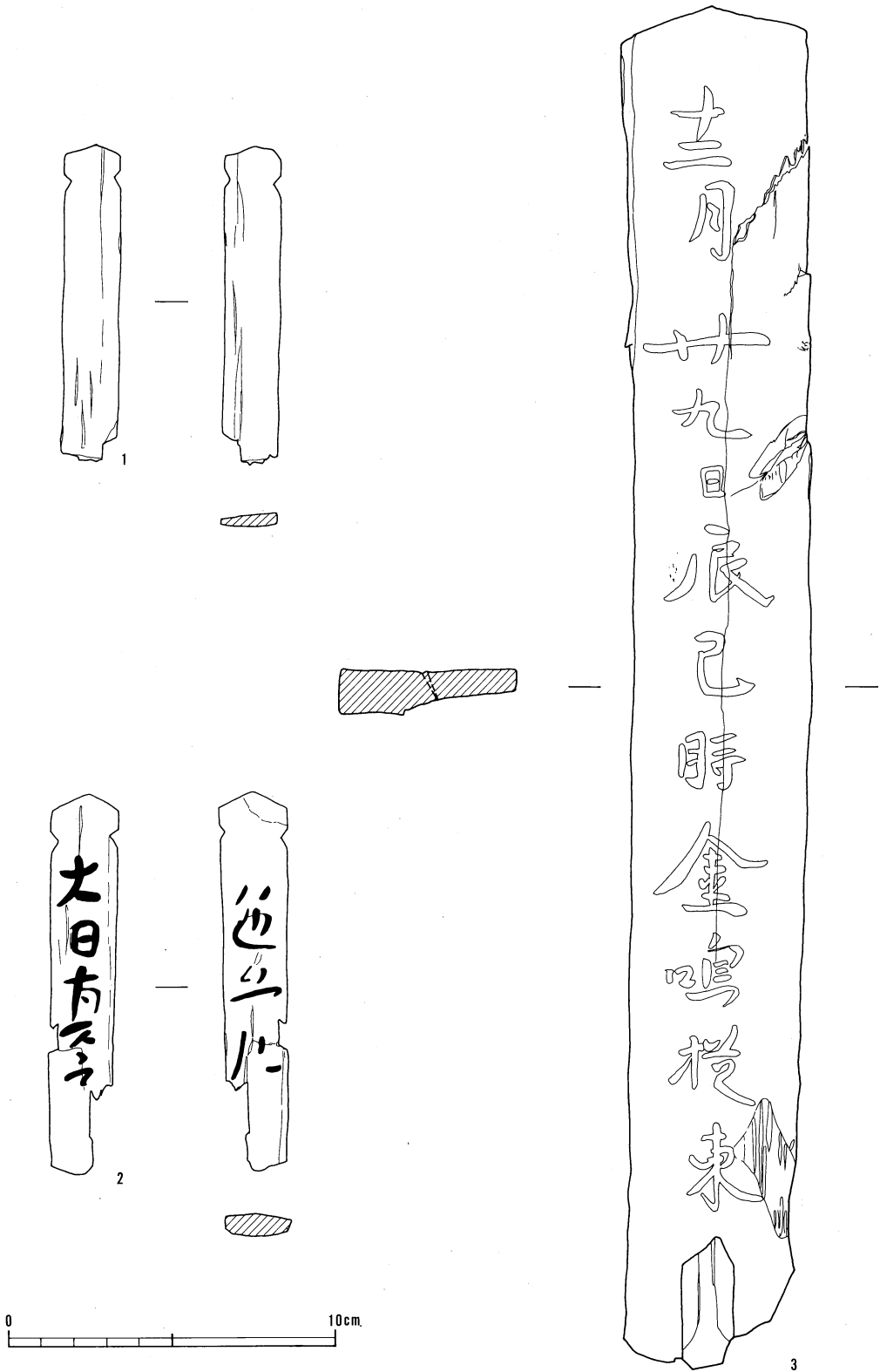
「大日真 □」
言カ

「尺迦 □ □」
牟カ尼カ

(116) × 20 × 5 杉 柎目材

木簡3 (第12図3)

残存長416mm、幅57mm、厚さ11mmを測る。頭部は、両端が削られ圭頭となり、下部は欠



第13図 前東代遺跡出土遺物(5)

損し不明である。文字は墨書痕が消失し、木面より浮きあがり下記のとおり判読できた。裏面には墨書は認められない。文字が浮きあがっている事から、かつて長期間にわたり地表に露出していたものと考えられる。

「十二月廿九日辰巳時金^{鳴カ}□従東」

(416) ×57×11 杉 柁目材

木簡4 (第14図4)

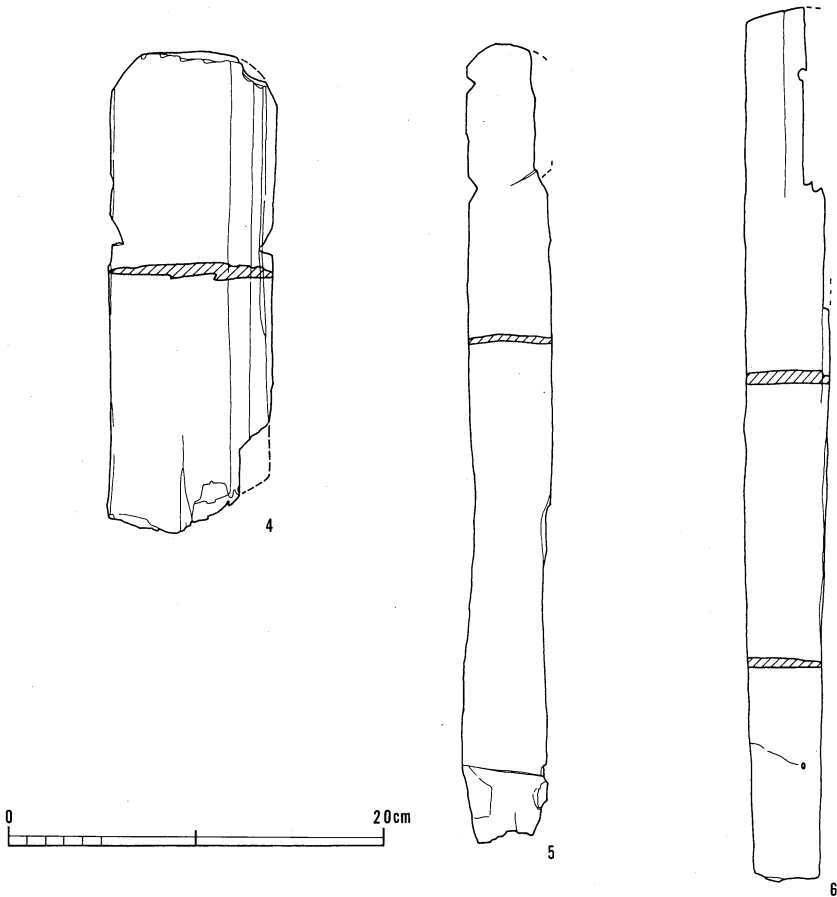
今回出土した木簡の中で最大幅のものである。

木簡4と同様に頭部両端を削り、上部両辺に切り込みを入れる。墨書痕は認められない。

(253) ×86×7 杉か 柁目材

木簡5 (第14図5)

頭部両端を削り、上部両辺に2箇所^の切り込みを入れる。さらに頭部から23cm程の箇所



第14図 前東代遺跡出土遺物(6)

から約10cmの長さで両辺を削り細く仕上げている。墨書は認められない。

(424) × 44 × 4 桧 柁目材

木簡6 (第14図6)

頭部を圭頭状に削る。頭部から下方に約4.5cm、また残存下端から上へ5.5cmの箇所にも凹痕が残る。他の材に打ち付けたものと考えられる。墨書痕は認められない。

(462) × 42 × 6 桧か 柁目材

以上、木簡として木札を記した。判読可能な木簡の意味については現時点では不明であるが、形態ならびに墨書内容から、これら木札は板塔姿および呪符と考えられる。なお、これら木簡(木札)は、いずれも東区大溝中層から出土したもので、その時期は、同時に出土する土器から平安時代前期頃と考えられる。

二又鋤(第15図7) 大溝中層

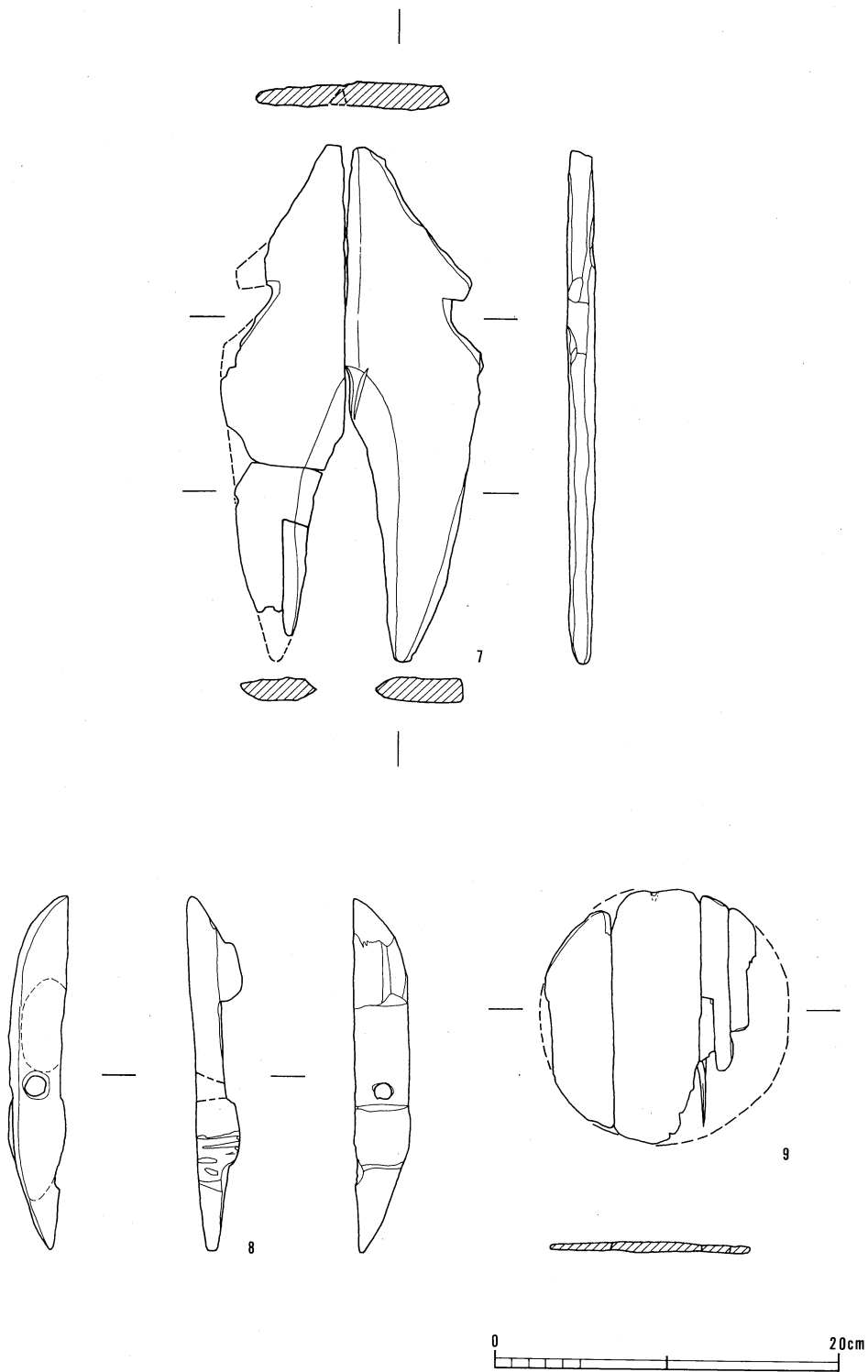
着柄部から両側に肩を張り出す「なすび形鋤」と呼ばれるタイプで、全長29.8cm、最大幅15.0cm。刃部の厚みは1.4cmである。片方の刃部端を欠損する。出土時からかなり摩耗が激しく細部の加工痕はよくわからない。

下駄(第15図8)

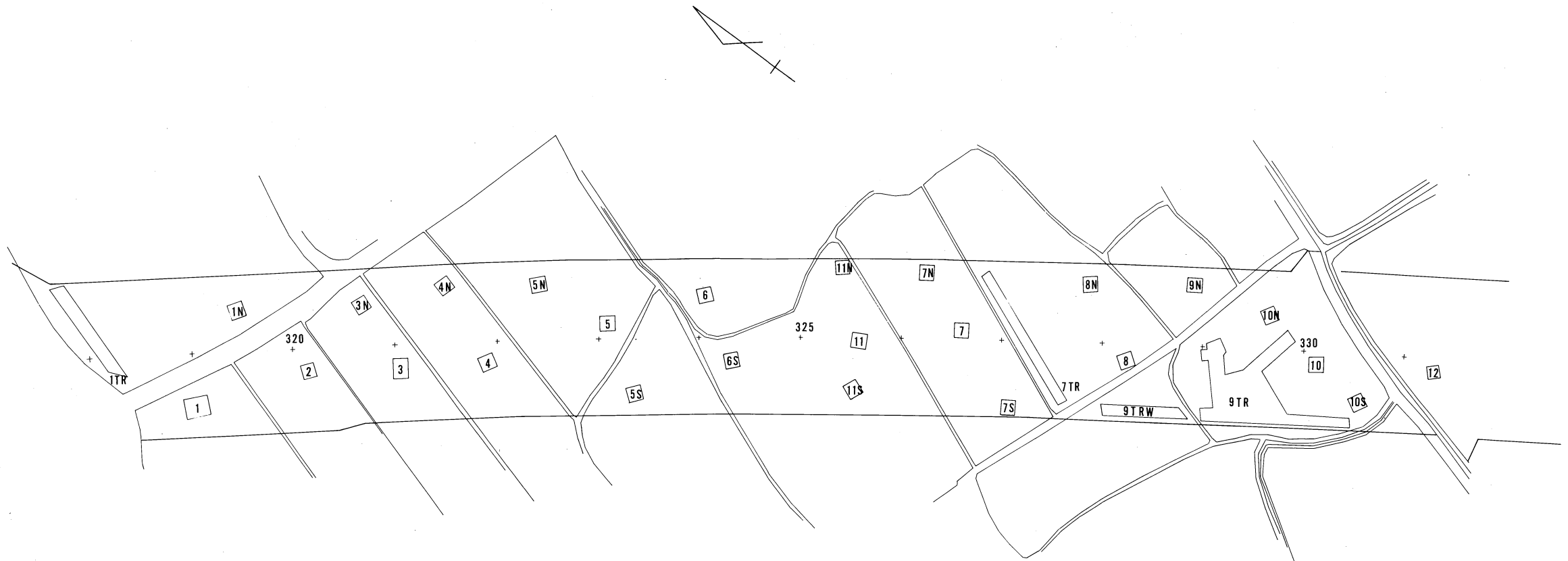
旧河道と大溝の合流点、黒灰色砂中から出土している。平面長円形の連歯下駄である。左側辺部のみで、全体は不明であるが、残存長20.4cm、台厚み1.5cm、前歯高1.2cm、後歯0.5cmを測る。歯間は水平に削り、前歯の前方および後歯の後方では、両端に向かって緩やかに削り上げている。後孔は垂直にあげられるが、のみもしくは小刀で穿孔した様で、特に台裏面では、正方形に近い形となっている。歯底部はかなり磨滅し、後歯がより激しく、長期間使用されたと考えられる。

木製容器(第15図9)

曲物容器の底板である。一枚板を円形に成形したもので、直径14.5cm、厚さ0.5cmを測る。周側面に側板を接合した際の釘あとが一箇所確認できる。材は桧と考えられ、柁目板を使用する。
(西口 和彦)



第15図 前東代遺跡出土遺物(7)



第 16 図 大村地区調査地点位置図



Ⅲ 大村地区

1 はじめに

姫路には、中世にいくつかの鋳物師の集落があった。今回調査を実施した大村地区は、これらの鋳物師集落の一つであろうと推定されている。

大村における鋳物業の開始がいつの時期であるのかは不明であるが、姫路鋳物業の中心地である野里が少くとも13世紀中頃に生産を始めていたことがわかっているため、大村においてもその頃すでに生産を行っていた可能性がある。そして、印南郡を中心とした鋳物売場を16世紀半ばまで大村の鋳物師が所有していたので、中世に相当規模の集落が存在していたことが想像される。⁽¹⁾

ところで、大村地区は、事前に道路予定地内を分布調査をした際には、雑草が繁っていたこともあって確認調査をするだけの資料が得られなかった場所である。しかし、前述のような経過や、姫路市教育委員会が大村池の南東で多量の鉍滓を採集しているため再度分布調査をしたところ、中世の土埧類を採集できたので確認調査を実施することにしたものである。

なお、大村地区の最も西寄りの南北大畦は、旧印南郡と旧飾磨郡の境界である。

2 調査の方法

県道から東側約250mを大村地区と呼称している。調査は、約20mごとに坪掘りを実施した。水田面積の広いものは、そのつど必要に応じて南と北に坪を設定し、トレンチを拡張した。

柱穴を確認した坪No.9では、トレンチを設定し、建物部分を全面調査域とした。

3 調査の結果

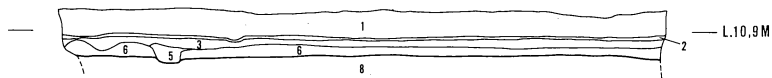
遺 構

坪掘り調査で、地山面(黄灰色シルトMnまじり)を検出できた坪(深さ30cmほど)は、No.1北、No.4、5北、No.11北、No.7、No.7南、No.8北、No.9北、No.10北、No.10、No.10南、No.12の13穴である。また地山が落ち込む肩を検出したものは、No.3北、No.3、No.11南の3穴で、黄灰色シルトを確認できなかったものは、No.2、No.4北、No.5南、No.6の4穴がある。

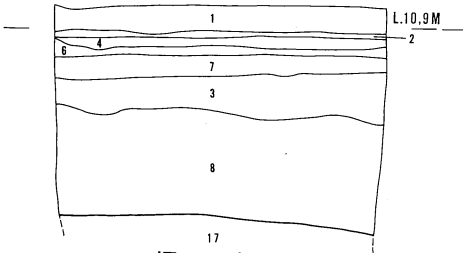
これらの結果からすれば、大村地区が山裾からのびる微高地の上に立地し、そこに幾筋かの小谷があったことが知れる。地山面に遺構を検出したのは第9トレンチ付近だけであるが、坪No.2・4では、灰色極細砂や黒褐色シルトから弥生土器片を検出している。

第9トレンチ拡張区

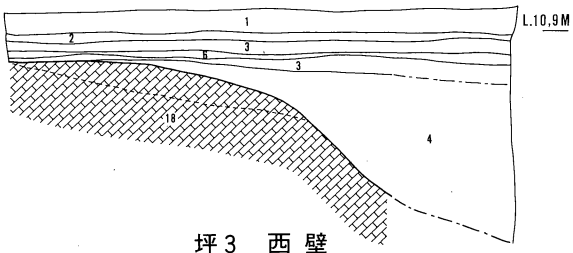
第9トレンチ拡張区では柱穴群と土埧を検出した。柱穴群のならばは、おおむね条里地



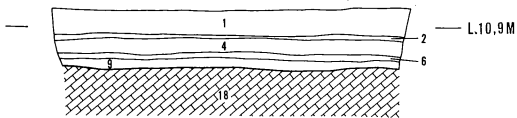
坪1 南壁



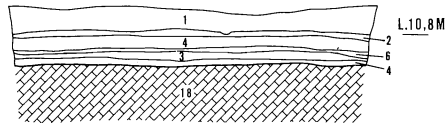
坪2 南壁



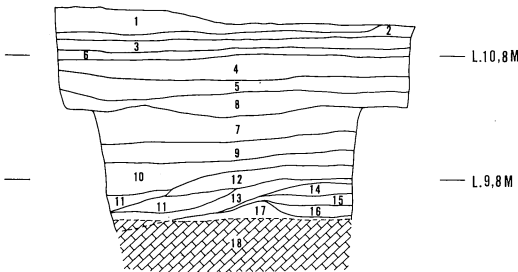
坪3 西壁



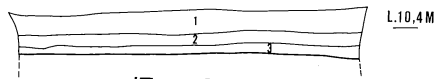
坪4 西壁



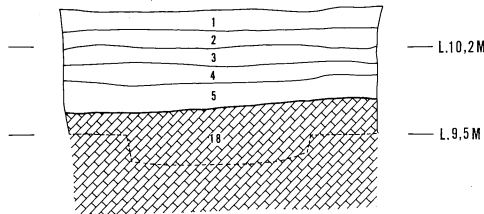
坪5 西壁



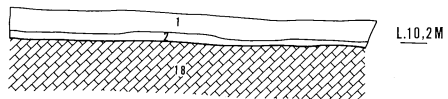
坪6 西壁



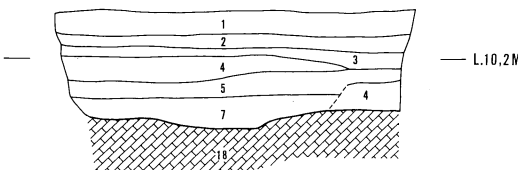
坪7 西壁



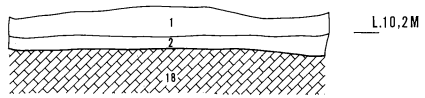
坪8 南壁



坪10 西壁



坪11 西壁



坪12 西壁

- | | | |
|-----------|----------------|-----------------|
| 1. 耕作土 | 7. 灰色極細砂+シルト | 13. 灰色中砂+細砂 |
| 2. 床土 | 8. 黒褐色シルト | 14. 黒灰色中砂+細砂 |
| 3. 灰色極細砂 | 9. 灰色シルト | 15. 黒灰色細砂+シルト |
| 4. 灰褐色極細砂 | 10. 黒灰色シルト | 16. 黒灰色粗砂 |
| 5. 黒褐色極細砂 | 11. 黒灰色極細砂+シルト | 17. 青灰色細砂+小礫 |
| 6. 黄灰色極細砂 | 12. 灰色細砂 | 18. 黄灰色シルト(レンガ) |



第17図 大村地区確認調査土層図

割方向と一致する。そのうち掘立柱建物を確認しえたのは1棟だけである。柱筋が条里方向に通るならばが数列あるが、柱間距離が一定しない。

S B01 (第20図、第21図64・65)

調査区の南端にある3間(6.2m)×2間(5.0m)の南北棟の建物である。南西部が調査区外へ出てしまって全様は明らかではないが、総柱の掘立柱建物である。柱穴の掘り方は0.3m、深さ0.4mで小さい。

S K01 (第21図、第22図66)

調査区の北端にある土塚で、近世の土塚(0.9m×0.9m、深さ0.38m)によって北側を欠いている。規模は、長径1.4m、短径0.7mの楕円形を呈し、深さは0.40mある。土塚埋土は黒褐色土で、底部から腐植した骨片を微量検出した。

S K02 (第19図)

柱穴群の東端で検出した土塚で、長径0.64m、短径0.62mのいびつな方形を呈し、深さは4cmを測る。土塚内には焼土がみとめられ、周辺の土も焼けている。柱穴群にともなうものであるが、遺物は出土しなかった。

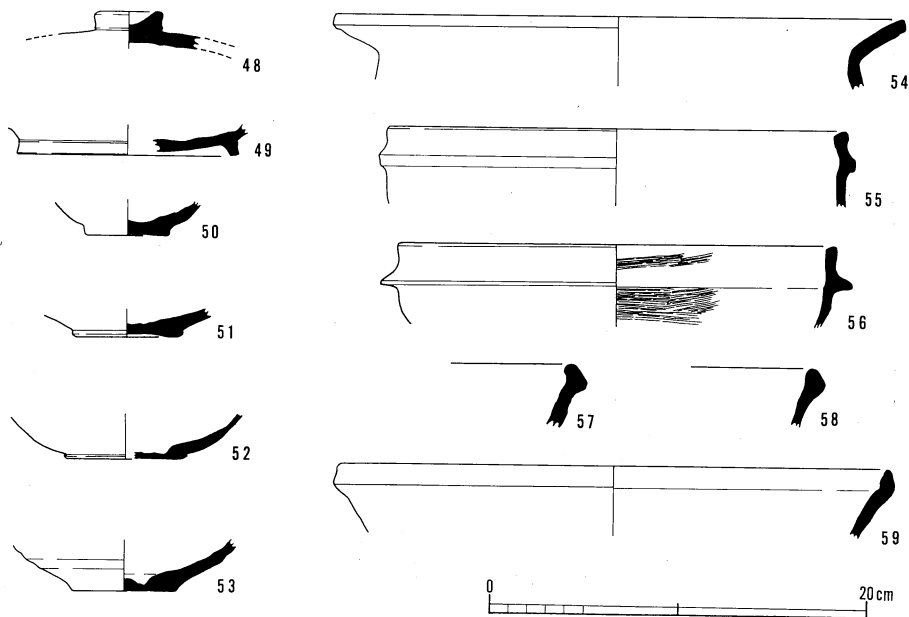
遺物

(48) (坪No.11南 灰色土)

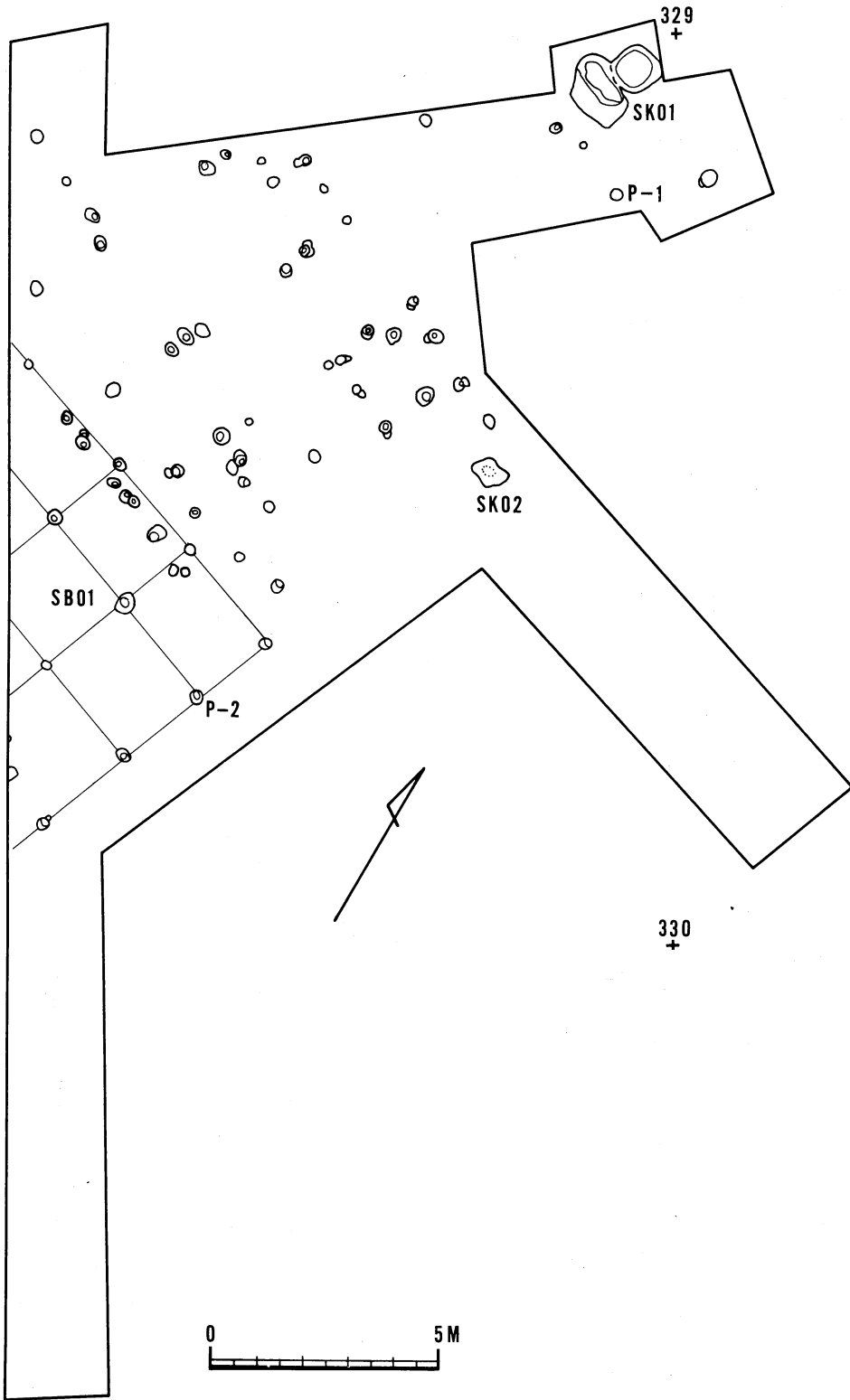
須恵器の蓋で、つまみ部分だけ残る。胎土は灰色。

(49) 坪No.7 灰色土

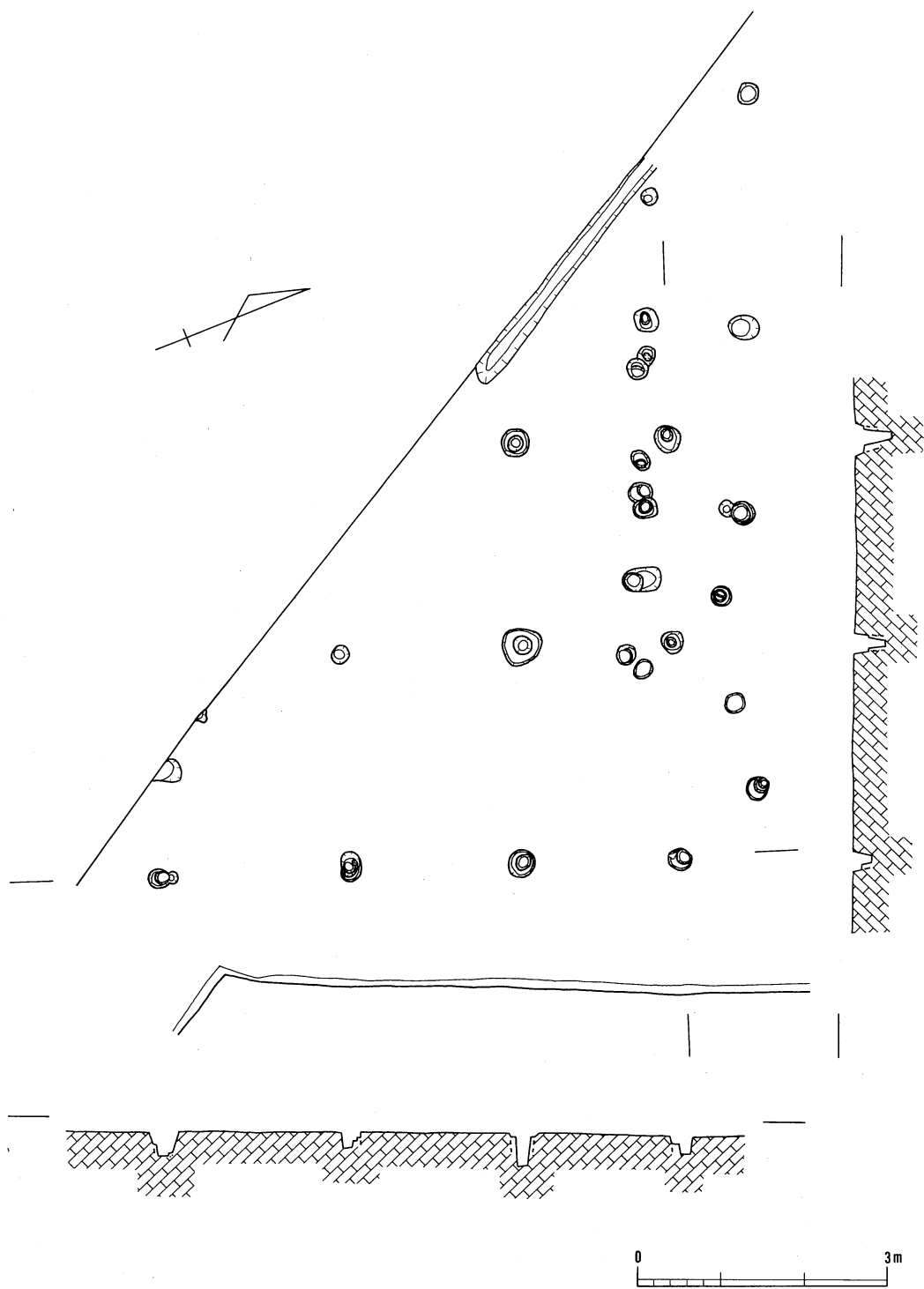
須恵器の坏で、貼り付け高台である。焼成は、やや甘く、灰白色。



第18図 大村地区出土遺物(1)



第19図 大村地区9 トレンチ拡張区



第 20 図 大村地区 9 トレンチ拡張区 SB01

(50) 坪No.6 灰色土

須恵器の塚で、円盤状高台である。底部に糸切り痕を残す焼成はやや甘く、灰白色。

(51) 坪No.11南 黒灰色土

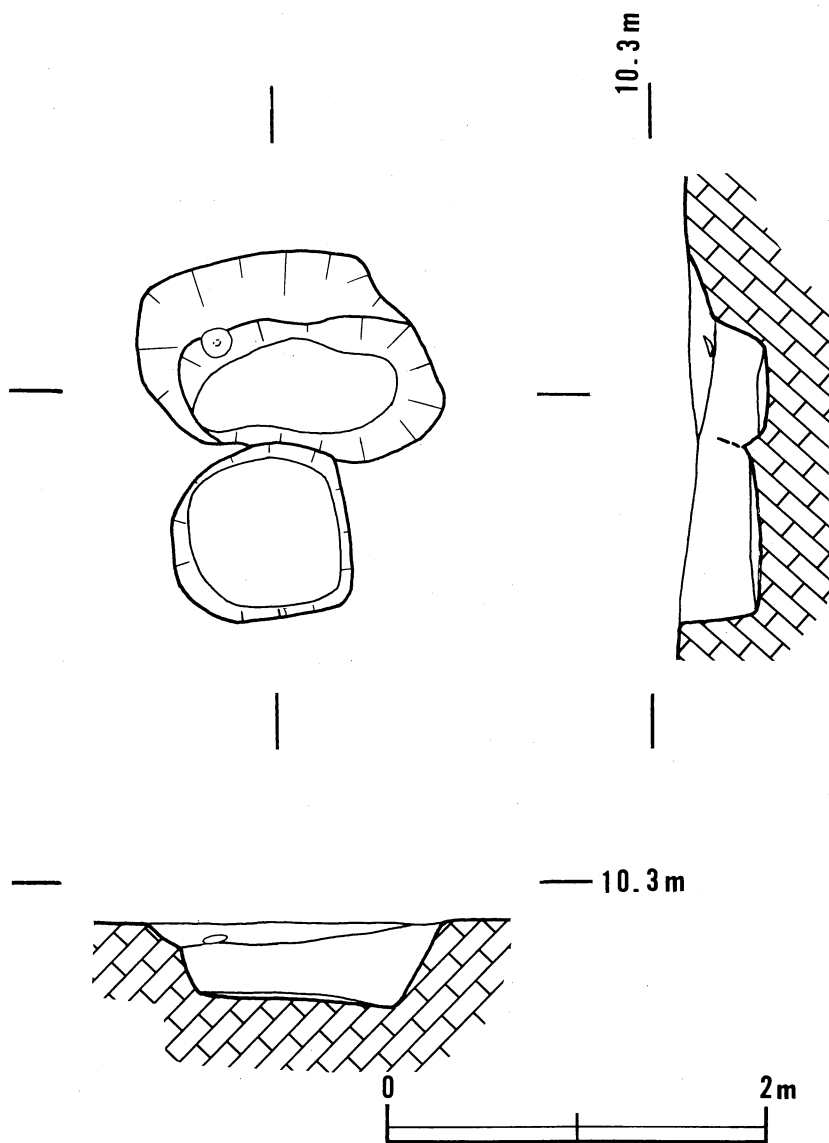
須恵器の塚で、高台部を若干残す。底部に糸切り痕を残す。青灰色。

(52) 坪No.11南 灰色土

須恵器の塚で、円盤状高台をもつ。底部に糸切り痕が残る。青灰色。

(53) 9 B トレンチ 床土

須恵器の塚で、円盤状高台をもつ。底部に糸切り痕が残る。灰色。焼成は堅い。



第21図 大村地区9トレンチ拡張区 SK01

(54) 7トレンチ 灰色土

土師器の甕で口径30.0cmを測る。口径部は「く」の字状に外反する。口縁部内側に横位のハケ目が残る。胎土は粗く、黄灰色。

(56) 坪No.9北 耕作土

土師器の土埧で、口径23.0cmを測る。内面に横方向のハケ目が残る。焼成は甘く、橙灰色。

(57) 坪No.8北 耕作土

須恵器のこね鉢の破片で口径は測れない。口縁部内側に凹みをもつ。灰色。

(59) 9Bトレンチ 灰色土

須恵器のこね鉢で、口径28.8cmを測る。口縁部内側に凹みをもつ。灰色。

(60) 9Bトレンチ 灰色土

土師器の土埧で、口径30.0cmを測る。内面に横方向のハケ目が残る。橙灰色。

(55) (58) (61) ~ (66) は第9トレンチ拡張区

(55) 灰色土

土師器の土埧で、口径24.2cmを測る。内外面とも横ナデによって調整されている。橙色。

(58) 灰色土

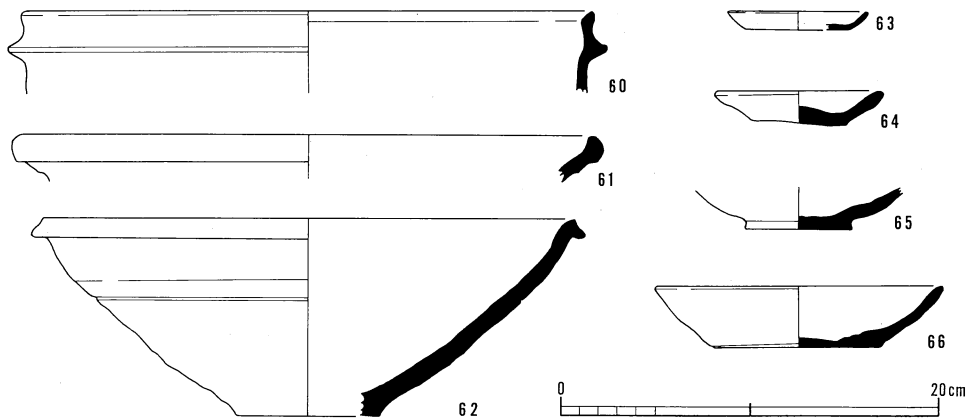
須恵器のこね鉢の破片である。焼成が甘く、土師器のように見える。橙灰色。

(61) 灰色土

須恵器のこね鉢で、口径30.0cmを測る。焼成は甘い。灰色

(62) 柱穴1

須恵器のこね鉢で、口径28.0cm、器高10.5cmを測り、底部に糸切り痕を残す。口縁部端部を外側に張りだすタイプで、12世紀前半の特徴を持つ。掘立柱の根固めに使用されたものである。青灰色。



第22図 大村地区出土遺物(2)

(63) 耕作土

土師器の小皿で、口径7.2cm、器高1.0cmを測る。摩耗のため、細部の調整不明。橙色。

(64) S B 01 柱穴 2

土師器の小皿で、口径8.5cm、器高1.8cmを測る。(63)に比べて厚手のつくり。底部糸切り。黄灰色。

(65) S B 01 柱穴 2

須恵器の埴で、円盤状高台が突出する。底部に糸切り痕が残る。青灰色。

(66) S K 01

土師器の埴である。口径14.9cm、器高3.3cm、底径は8.8cmである。底部は糸切り痕が残る。橙灰色。

4 小結

大村地区は、文献に残る中世鋳物師集落として調査成果に多大の期待をもったが、結果は東端で掘立柱の柱穴群を検出したにとどまった。

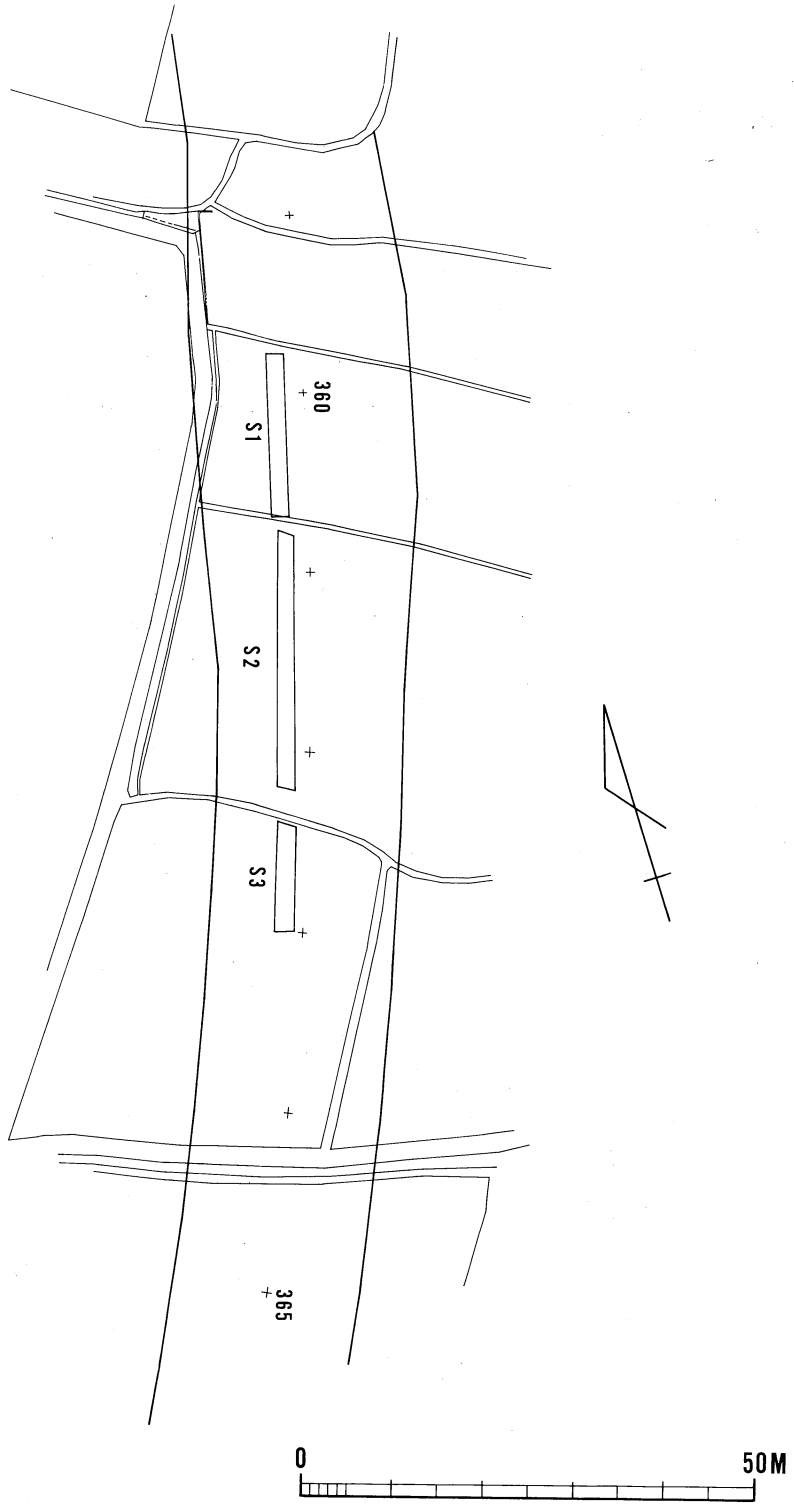
S B 01は、3×2間の掘立柱建物で、柱穴出土の遺物(64・65)から平安時代後期に位置付けられる。S K 01は、土壇上層から出土した土師器(66)によって、S B 01と大差ない時期のものと考えられる。

また、建物跡付近で数個の鋳滓を検出したが、鋳物集落を想定しうるだけの資料ではない。

したがって、中世鋳物師集落大村は、姫路市教育委員会が分布調査で多量の鋳滓を採集した大村池付近にあったとするのが妥当である。

(水口 富夫)

(1) 姫路市史 第3巻 1980



第 23 图 佐土地区調査地点位置图

IV 佐土地区

1 調査の方法

古代山陽道は、条里区画の余剰帯（1町方格に対して幅15~20m）の検討によって推定地が決定されている。今回の調査地点は、「草上駅家」（姫路市本町）から「佐突駅家」（姫路市別所町佐土）に至る古代山陽道推定地が播但自動車道と交わる場所にあたる。木下良氏が提示された図によれば、条里の余剰帯は、調査地点の西端付近までのびている。

調査地点は、別所町佐土新から派生する谷筋にあたり、条里区画は存在しない。このため、古代山陽道推定地の延伸方向を中心にして南北にそれぞれ長さ約30m幅2mのトレンチを設定した。これは、われわれの推定延伸方向が正しいという確認がもてなかったのと、迂回している可能性もあるという判断によるものである。

なお、この地区での事前の分布調査においては、土器片はほとんど採集できなかった。

2 調査結果

遺物

図で示したように、調査で出土した遺物は、いずれも小破片のみであった。

(67) 第2トレンチ 第3層

須恵器の坏で、口径8.8cm、器高2.5cmを測る。体部外面には一面に自然釉がかかっている。胎土は灰白色。

(68) 第2トレンチ 第1層

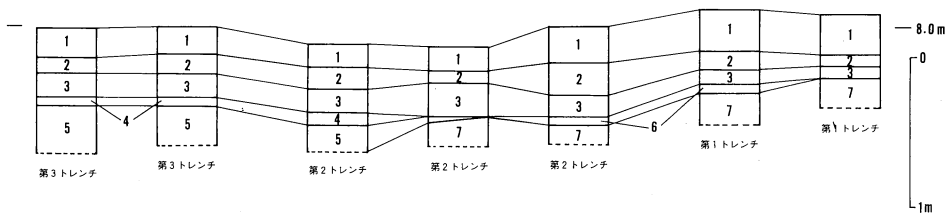
須恵器の蓋で、口径14.4cmを測る。青灰色。

(69) 第3トレンチ 第1層

土師器の碗で、口径15.3cmを測る。ロクロ整形の痕跡が明瞭に残り、口縁はわずかに外反する。暗黄灰色。

(70・71) 第2トレンチ 第3層

須恵器でこね鉢の破片である。(70)は(71)に比べると口縁外側のふくらみが少な



- | | | | |
|-----------|---------------|--------------|-----------|
| 1. 耕作土 | 3. 灰色極細砂+シルト | 5. 黒褐色粗砂+シルト | 7. 黒褐色極細砂 |
| 2. 黄灰色極細砂 | 4. 黄灰色極細砂+シルト | 6. 黄灰色細砂 | |

第24図 佐土地区トレンチ西壁断面柱状図

い。明石魚住古窯跡の製品である。(70)は青灰色、(71)は灰色。

(72) 第3トレンチ 第3層

内面に鉄釉のかかった坏で、口径5.3cm、器高1.8cmを測る。全体の約半分が残る。底部に糸切り痕。

(73) 第2トレンチ 第3層

小片のため口径は測れないが、土師質の土埴で、内面に横位のハケ目、外面に右上りの粗い叩き目が残る。

遺構

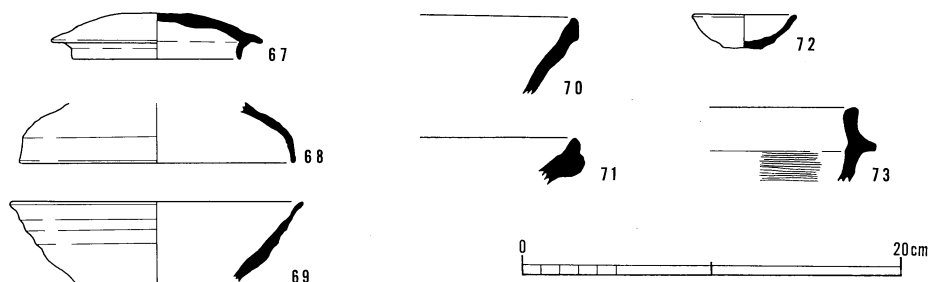
調査は、第1トレンチから順次掘り進めた。遺物の大半は小破片で、第3層から出土した。第4層以下から遺物がほとんど出土しないことや、第7層にボーリング棒をさし込んでも、第7層が深く堆積することから調査は、第7層を確認して終了とした。

以上の調査結果からすると、調査地点西側微高地に認められた条里余剩帯は、東側で谷地形に入ると全く認められなくなる。谷地形の埋没も、出土土器からみて中世以後のことなりこれを裏づけている。

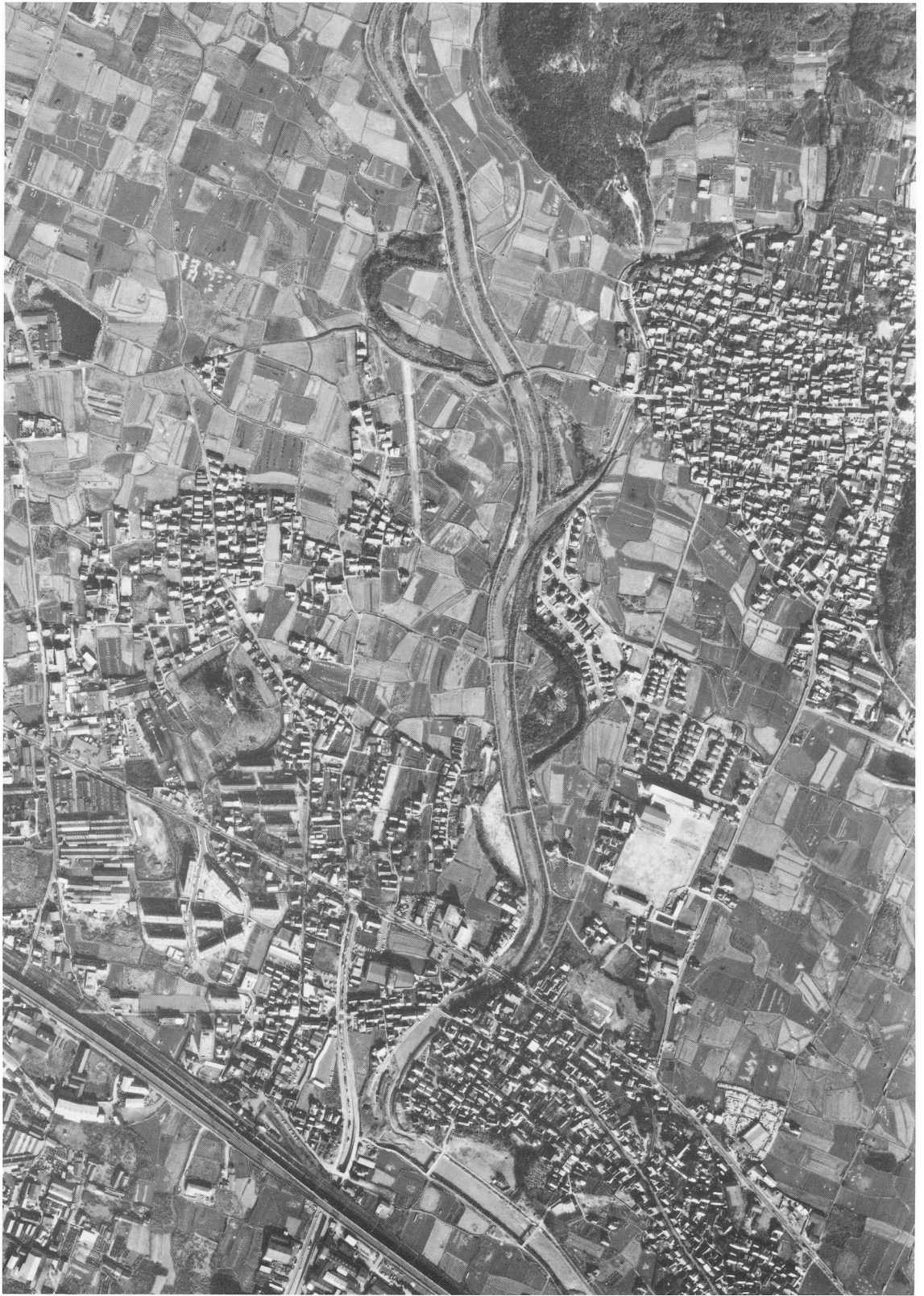
このトレンチ調査だけで断言するわけにはいかないにしても、今回の調査では、古代山陽道の痕跡は見いだしえなかった。

(水口 富夫)

(1) 「古代山陽道の検討」『古代を考える』17 1978。



第25図 佐土地区出土遺物





前東代遺跡 調査前



前東代遺跡 第4トレンチ



前東代遺跡 全 景



前東代遺跡 大 溝



前東代遺跡 第7トレンチ



前東代遺跡 第7トレンチ東壁



前東代遺跡 第3トレンチ



前東代遺跡 第8トレンチ



大村地区 (調査前)



大村地区 第9トレント拡張区



大村地区 土坑 1



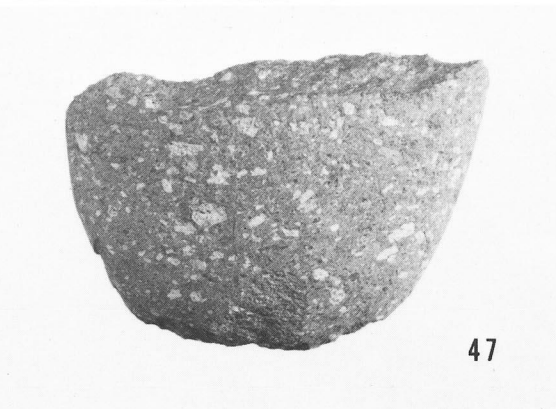
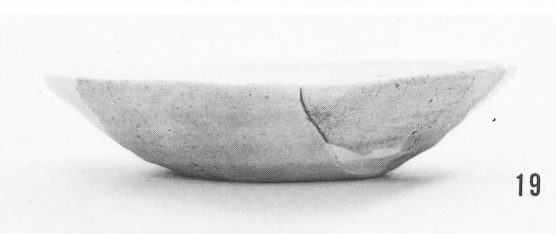
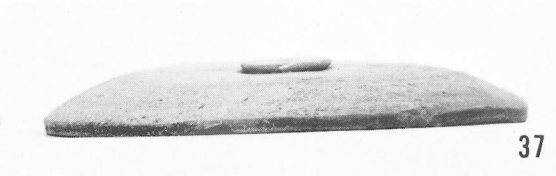
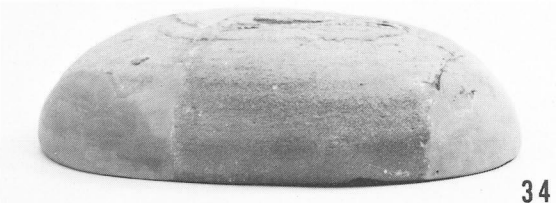
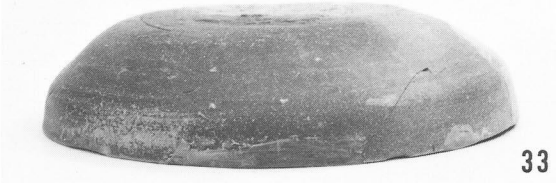
大村地区 建物跡



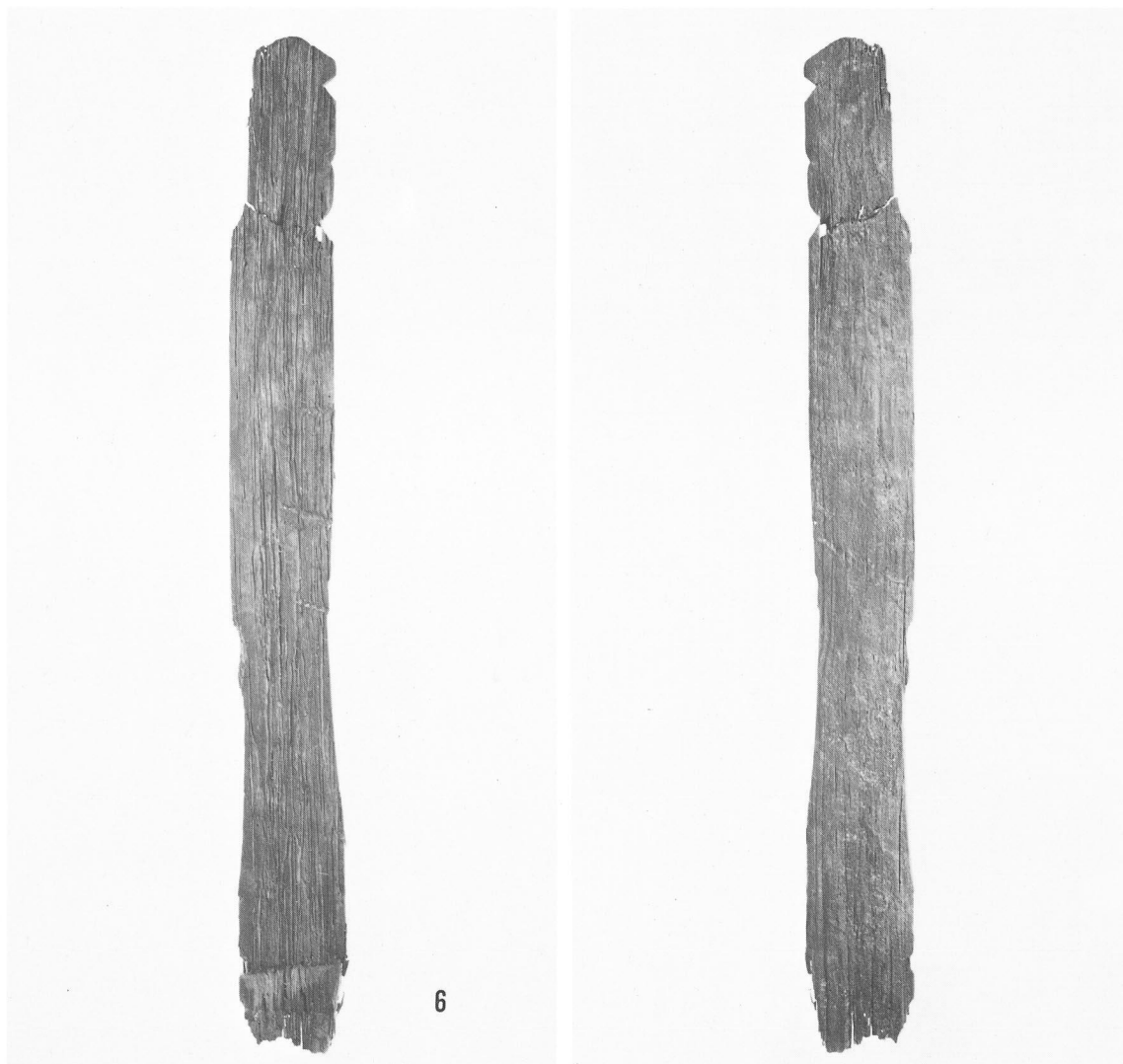
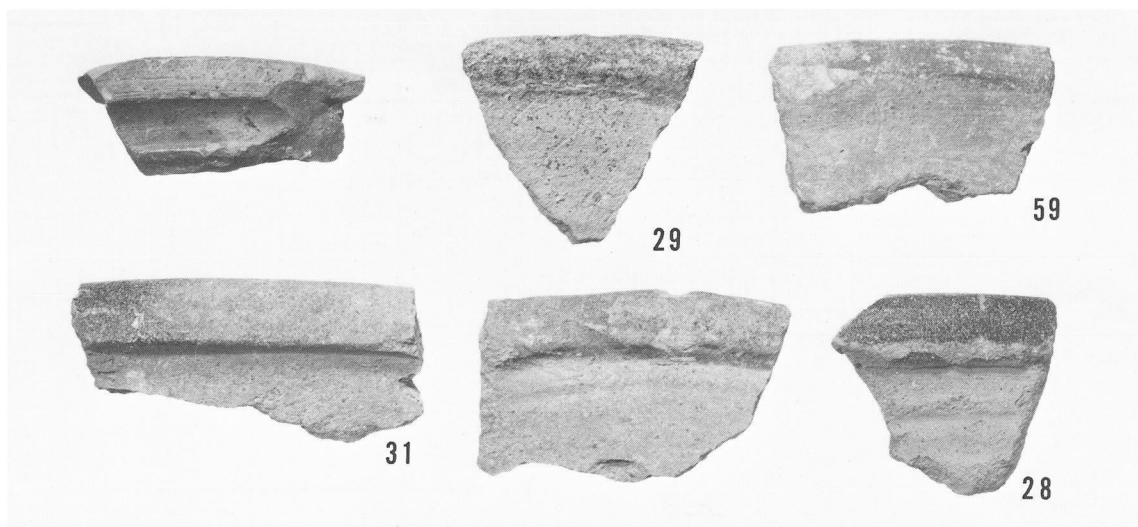
佐土地区 第1トレンチ



佐土地区 第3トレンチ







兵庫県文化財調査報告書 第29集

昭和60年3月31日 発行

前 東 代 遺 跡

—播但有料自動車道建設にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅲ)—

編集・発行 兵庫県教育委員会

神戸市中央区下山手通5丁目10-1
〒650 TEL 078 (341) 7711

印刷 株式会社 精 文 舎

神戸市兵庫区下沢通6丁目2番18号
〒652 TEL 078 (575) 4729
